

地域交流センター通信 24

December 2013, Volume 24

特集3

出会いを生み
喜びを引き出す公開講座

特集2

地域・故郷を思う
—東日本大震災と私たち—
(その5)

特集1

大学と地域を
ミュージアムとして
市民と共有する



都留文科大学地域交流研究センターとは？

地域交流研究センターでは、地域に根ざし地域と共同した活動を推進し、つぎのような取り組みをおこないます。

- 1) 地域交流に関するプロジェクトの推進
- 2) 学校の先生方などの教育相談
- 3) 地域のニーズに応えた貢献活動
- 4) さまざまな地域交流の連携の推進

13.10.27
題字 黒部行子
絵 成瀬洋平 (本学卒業生)

Contents

都留文科大学 地域交流センター通信 第24号 目次

巻頭文…都留文科大学回顧―昭和の日々―

近藤幹雄

4

特集1

大学と地域をミュージアムとして市民と共有する

■都留文科大学新図書館・ビオトープ計画案

山裾をつなぎ 蝶が通るみちをつくる (資料)

編集部

6

■新図書館前のビオトープづくり

附属図書館ビオトープの手入れ―設置後の経過と展望―

西教生

8

ビオトープでの出会い

別符沙都樹

9

■キャンパスをフィールド・ミュージアムに

クルミひろいをする キャンパスにリスを呼ぶ会

本田祐士

10

つるりん (二号館裏の林) との出会い

塚本真央

11

■田んぼと畑と里山

2年間の田んぼ活動を通して

稲垣ほか

12

畑で新たな挑戦

前澤志依

13

■旧道富士道を歩く

記憶に導かれる地域探訪

牛丸景太

14

きつけかけを掴む旅

崎田史浩

15

■子どもたちの自然への関心と表現活動

子どもの目を想い起こす―自然観察会を通して感じたこと―

篠原円香

16

観察の楽しみ―体験で自然を感じる―

杉山圭

17

森のなかでの環境教育 ―都留文科大学附属小学校―

小口尚良

18

うらやまに出かけよう ―都留文科大学附属小学校―

原田裕太

19

地域における表現活動に参加する―図工・美術教室の新たな取り組み―

鳥原正敏

20

谷二 (やに・谷村第二小学校) ラボ続いています!

山森美穂

22

■都留文科大学「特別研究」共同研究

写真織りに出会う―大学発の特産品への挑戦―

吉住典子

23



右頁写真は2004年4月5日撮影
左頁写真は2013年10月22日撮影



特集2

■ 市立図書館、博物館との連携事業	古屋知美	24
「夏休み昆虫写真展」を企画・開催して	森屋雅幸	25
「ミュージアム都留」との連携事業		
わたしとあなたの都留アルバム事業から考えること		
■ 共同研究論文（資料）		
「研究ノート 都留市十日市場における食資源調査の試み―地域再生のための研究アプローチの検討と実践―」より	西丸莞宏・泉桂子・北垣憲仁	26
私の故郷のこと ～3・11と遠野市～	菊池萌	27
釜石市鶴住居地区における被災状況調査の概要について	高田研	28

地域・故郷を思う ―東日本大震災と私たち―（その5）

特集3

出会いを生み喜びを引き出す公開講座

■ 県民コミュニティーカレッジ	青拓美	30
響きあう心と心		
■ 都留文科大 子ども公開講座		
小学生と英語で楽しもう！「Hello! 英語でワクワク2013」	奥脇奈津美・前川未来	32
「折り紙を使った算数」を終えて	寺川宏之	33
子どもたちの楽しみの可能性にびっくり～iPadを使った紙芝居とよみ聞かせ・ブックトーク～	日向良和	34
子どもたちと過ごした煌めきの時	清水雅彦	35
■ 現職教員教育講座		
中学の社会科学をどう創り出すか～現職教員教育講座を受講して～	佐藤親雄	36
■ 都留文科大地域交流研究センター・地域教育相談室主催 第一回公開講座		
学級や部活動の指導の基本を考える	梶原斉	37
■ 都留文科大の公開講座の歴史		
都留短期大学の「夏期大学」（昭和30年）の記録（資料）	編集部	38

トピックス

壁新聞が「繋ぐ」もの～ジャーナリスト山本美香さんの取材を通して～	萩原好	39
----------------------------------	-----	----

昭和の日々

近藤幹雄

この大学を退職して十年以上を経た今、大学の前庭に立って美しいキャンパスを眺めるとき、まことに今昔の感にたえません。あの質素な木造校舎で肩寄せ合って懸命に学んでいた学生の姿、新校舎が今の地に建ち上がったときの喜びの声、そして続く混乱と激動の日々が鮮明に蘇ります。



都留文科大学の歴史は、昭和二十八年に設置された山梨県立臨時教員養成所に始まります。当時、教員の不足は深刻な状況だったので、山梨県は条例によって、谷村町（現都留市）と身延町に二年間の教員養成所を設置しました。教員の不足は山梨県全域の問題ではありませんが、とくに県東部や南部ではその傾向が顕著で、「地元出身の教師がほしい」という声は強くありました。臨時教員養成所が都留市立都留短期大学に、更に都留文科大学に成長した歴史の出発点に、このような地域社会の願いと深い関連があったことを見落とすことは出来ません。

四年制都留文科大学は昭和三十五年に発足しました。文学部の中に初等教育科と国文科が設けられ、その後英文科が増設され、昭和三十八年に英文科の新入生を迎えました。学生数も教員数も増え、学内は一年毎に賑やかになりました。しかし、大学の実情を見ると、暗い冬

の季節を耐え続けなければならない日々が続きました。

諸橋轍次学長は昭和三十四年の年頭雑感に「(前略) 設備の点は率直に云って甚だ不十分だ。図書も足りない。運動場も無い。教室教具も少ない。教授や講師の研究費に至っては皆無だ。(後略)」と、厳しく問題点を指摘されています。当時の学生にも多くの悩みや苦しみが深くあったと思います。今のように、賑わいのある街ではなかった静かで寂しい環境の中で感じる逃れようもない孤独感に苦しんだ人も多かったのだと思います。「文化的交流する場も保証されていない状況の中でどれだけそれにくちかかっていくかは、一人一人が『よし、やるぞ』といった青春の大きなエネルギーにかかっています。」(昭和四十八年度新入生歓迎実行委員会委員長 国文三年 柴田恵子) 学生のこの文章にも当時の大学を取り巻く状況や、それに屈せず果敢に克服しようという若者の切なる願いが現れています。我々教師も、教育や研究向上を一日も速く実現し、学生の要望に応え学生を励まし、大学を発展させたいと日々努力を重ねてきました。



学生、教師そして都留市も等しく新たな希望と喜びをもって新校舎建設を見守りました。しかし、新校舎落成式をめぐって、所謂都留文科大学事件(注1)が起きました。

新校舎は、昭和四十年に第一期工事が完了し、その落成式が五月二十三日に都留市主催で新校舎屋上で開かれました。この落成式に対して、学生から強い不満が叫ばれたのです。学生は入学金とともに校舎建設費として五万円を納入していただけに、主に都留市関係者だけで開催されるのは遺憾であるとし、一部の学生は妨害の直接行動に訴えました。市当局は、この学生の行動は、大学の学生委員(教授会選出の五名

都留文科大学回顧

の教師)の指導の欠如であるとし、学長に学生自治会の学生たちと五名の教師の処分を要求し、これを受けて、教授会は学生を退学処分に、五名の教師を免職処分になりました。この事件がマスメディアに報じられると、多くの大学の研究者から「大学の自治を守れ」という支援の声が寄せられました。その後、学生の処分は教授会において、教員の処分は都留市公平委員会の仲裁で白紙撤回され、数名の学生を除いて、それぞれ大学に復帰いたしました。

この事件以後も、学生からの要求は度々大学に出されてきました。学生からのさまざまな要求は、大学でのより高い研究レベルを求めようという切実な願いから生まれたものであり、大学に活力をもたらす大事なエネルギーであると私は考えます。



都留文科大学発足以来学生の多くが、都留市内のアパートや下宿に住み、そこから通学しています。このことは、大学にとつてもまた都留市にとつても大変に意味のある個性であると言えるでしょう。昭和五十一年に着任された和歌森太郎学長は、「地域社会学科」増設構想(注2)を出されましたが、病に斃られたために、残念ながら実現しませんでした。その後昭和六十一年に開設された「社会学科」誕生の原点であったと思います。

昭和六十年十一月の「大学報」には、都留市の自然や子どもたち、それに中国からの帰国家族とのふれあいや研究などを続けている学生たちの手記が寄せられています。例えば、「宝鏡寺にて〜障害児ボランティア活動〜」とか、「ムササビと森を守る会について」とか、あるい

は帰国者への「日本語指導にあたって」など学生たちの積極的な活動が記録されています。地域の豊かな自然や、町にすむ市民との親密な文化的人間的交流が早くからすすめられていることは、学生にとつても市民にとつても価値ある歴史だと思えます。現在は、一層広い分野において、また専門の深さをもって活発に展開されていることは、嬉しいことです。大学が教育や学術研究の専門の高さを通して地域の市民と理解し合い協力し合い、都留市と大学の両者が理解を深め協力し、ともに栄えることこそ大切なのです。

(こんどう みきお・本学名誉教授)

編集部による解説

【近藤幹雄先生】 本学名誉教授(平成8年・1996年3月に定年退職)。近藤先生は都留市立都留短期大学創設時より専任教員として都留文科大学の発展を内部から支え続けられ、その間、学長事務代理の要職も歴任されている。巻頭文に記されている「都留文科大学事件」の直接の当事者のお一人である。音楽教育を中心に担われ、合唱曲の作曲など多方面で活躍されている。近藤先生によつて作曲された都留科大学学生歌「花のかげ」(作詞は石村正二先生)は学生たちに愛情をもつて歌い継がれている。

【都留文科大学事件】(注1)その貴重な記録が、遠山茂樹・森川金寿編『都留文科大学事件の記録』盛田書店、1996年11月30日、としてまとめられている。この「事件」は、都留文科大学のみならず広く今日の大学の方向を照らす内容をもつ。

【和歌森太郎学長による「地域社会学科」増設構想】(注2) 本誌第9号(2006年3月)の20P〜21Pに、その資料が掲載されている。

蝶が通るみちをつくる (資料)

■都留文科大学新図書館・ピオトープ計画案

新図書館前のピオトープは、新図書館の理念と一体のものとして建設委員会で論議され教授会で決定されました。その教授会（平成13年10月10日）の議案「新図書館建設委員会経過報告及びピオトープに関する教授会提案」（山本安夫先生：当時新図書館建設委員会委員長）に添付された図面（社会学科 都市環境設計論研究室）とピオトープ計画案（今泉吉晴先生：当時社会学科教授・環境生態論）を、ピオトープ理念・構想を想起する手がかりとして掲載します。

大学を取り巻く地域では、早くから「ムリネモ」（ムササビ、リス、ネズミ、モグラ）観察の森づくりの実践があり、その素地が大学の地域交流研究センター活動を促し、地域との交流を多彩なものにしてきました。本特集では、新図書館前にピオトープをつくりキャンパスをフィールド・ミュージアムとしてつくっていくという理念と構想を想起し、その実践の進捗を、地域とのつながりを視野に入れつつ確認していきます。

具体的には、①学生・教員たちが地域のゆたかなフィールドに注目しさまざまな学んできていること、②キャンパスを地域のフィールド・ミュージアムと一体的なものとして大事に育もうとしてきていること、③地域とキャンパスのフィールドを、学生・職員・教員と地域の子どもたち・市民との共有のものとし交流を重ねてきていること、などに光を当てます。

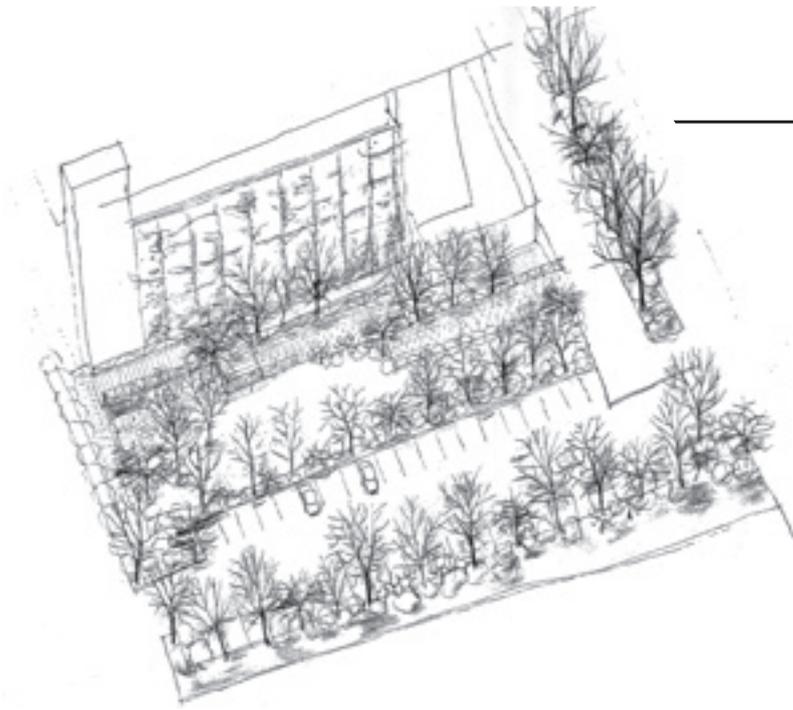
新図書館エクステリアの維持管理

社会学科教授・環境生態論 ■ 今泉吉晴

- ①基本的には一号館まえの林やキャンパス全域の維持管理にエコロジーの観点をくわえることが必要で、その一環として新図書館周辺の「植栽と池」の維持管理を考える。
- ②全体計画がない現段階では、新図書館周辺の植栽を近隣の並木、植え込み、公園、畑、人家の庭、尾崎山の森などとの関係の中に位置づけ、維持管理を有効なものとする。
- ③新図書館は、楽山と月見山に挟まれた一升巻の谷の谷口にある。谷口の東（楽山側）の半ばを県の南都留庁舎が占め、西（月見山側）の半ばを新図書館の敷地が占める。
- ④植生の現況を見ると、楽山と月見山の森を大学キャンパスと南都留総合庁舎の敷地が切っているが、南都留総合庁舎の敷地の南端にそって植えられたマツとケヤキの並木がかるうじて、谷口を半ばまでつないでいる。
- ⑤そこで、新図書館の敷地の北端に予定される駐車場に並木をつくれれば、南都留総合庁舎の並木につながり、谷口のほぼぜんたいを並木でむすぶことができる。
- ⑥この並木は、尾崎山の森でくらす鳥や蝶や蜻蛉が、その山裾である楽山から月見山、あるいはその逆の経路で林縁にそって移動する際の、交通幹線になる。
- ⑦新図書館のエクステリアとして考えられている今回の「植栽と池」は、上の現況に対して設置されるピオトープである。図書館建設にあわせて「植栽と池」の



山裾をつなぎ



ためにつくられる基本的な構造が生物のくらしにつかわれて、ビオトープとして働く。

⑧池をつくれれば、蜻蛉、カゲロウ、カエル、などが移動してきて、池の形状とキャパシティに応じて、くらしはじめ、一定のバランスに到達する。何もつくらずに裸地として放置する場合に比べて、一定のバランスに到達するのを助ける施設となる。

維持管理の手間と管理費は、池を設置しない場合にくらべ、少なくすむ。

⑨植栽も、池と同じである。並木は、日陰をつくり、

日陰の維持管理は裸地より楽である。日向に強い雑草がへり、多年草がふえて安定したグラウンドカバーの群落をつくる。

⑩すなわち、キャンパス・コミュニティの考えを、植物、動物、地形もふくめたより広いエコロジカルなコミュニティとしてとらえ直し、それらコミュニティのメンバーが機能しあうことで、おのずから維持管理が行われる。私たちは、その働きを見守り、最小限の方向づけをする。

附属図書館ビオトープの手入れ

■西 教生

—設置後の経過と展望—

都留文科大学附属図書館のビオトープは、2004年に設置されました。設置後の維持管理は、地域交流研究センターのフィールド・ミュージアム部門関係の教員や職員、学生などがおこなってきました。今年(2013年)で設置後から9年が経ちます。ここでは、どのような手入れをしてきたのか、ビオトープがどのような変化を遂げてきたのかを振り返ってみたいと思います。

初期の植栽によって、エノキやエゴノキなどの樹木が植えられていました。しかし、さまざまな生きものとの出会いを楽しむには、いろんな植物が必要になります。かといって、何を植えてもいいというわけではありません。都留市の生態系に合ったものを選び、それらを少しずつ移植していきました。具体的には、移植する植物はなるべく大学の周辺に生えている在来種にしています。

ビオトープの手入れで多くの時間を割いたのは草刈りです。梅雨ごろには大人の膝よりも高い位置にまで草が伸びます。そのような環境もあっていいのですが、基本的には定期的に草刈りをしてきました。とくに最初のころは頻繁に草を刈っていました。次第にアワブキやケヤキ、ネムノキなどが大きくなり、葉を茂らせると草の勢いもなくなってきたことから、いまでは草刈りの数回も減りました。こうして、工場跡地に設置

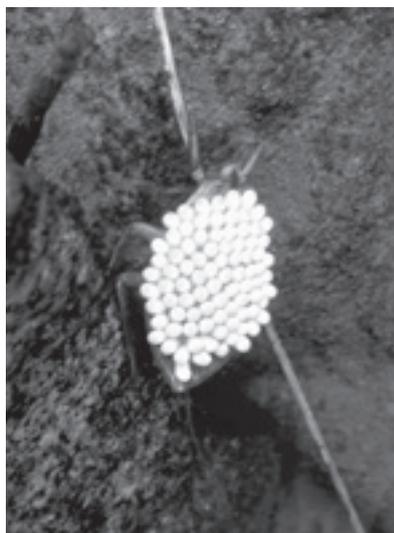
されたビオトープがどのように変わっていくのかをつぶさに追うのは楽しいものです。

嬉しいこともありました。たとえば、水路には山梨県産のメダカが放されていますが、ここではコオイムシやミスカマキリ、ヤマアカガエルなども生息するようになりました。これらは周辺からビオトープにやって来た生きものです。コオイムシやヤマアカガエルはビオトープで繁殖もしています。動物の繁殖が確認された場合、この場所はその生きものにとって繁殖するための条件が揃っていると考えられます。子どもが成長するときに必要な食べ物や隠れる場所、水温や流水の速さなどの条件が揃わないと繁殖は難しいでしょう。

手入れの合間に、さまざまな生きものを観察しました。オオカマキリがアシナガバチ類の成虫を捕食している場面や、クヌギの葉上に止まるムラサキシジミのオスなどはとくに強く印象に残っています。

このビオトープには、どれくらいの種類の動物がいるのかはまだ調べられていません。アズマモグラは確認されていますが、いつか入ってきて来るでしょう。オニグルミの実にアカネズミの食べ跡が見られるのも、それほど遠い未来ではないと思います。私はここで、オオタカが営巣してくれることを夢見ています。

(にし) のりお・本学非常勤講師



背中に卵をつけたコオイムシのオス



植栽された木は生長し、林になりつつある

ビオトープでの出会い

■ 別符沙都樹

都留文科大学附属図書館横のビオトープの一角に、身長をゆうに超える高さの紫と白のブッドレアがあります。10月3日に前を通ったとき、オオスカシバが白いブッドレアへ蜜を吸いに来ていました。目にするのはそのときが初めてで、途端に目を奪われました。ホバリングしながら器用に枝葉を避け、一つひとつの小さな花に口吻の照準を定めていてねいに巡っていきます。花から花へ飛び回る姿は軽やかで、とても繊細な動きでした。

同じ日に、本学非常勤講師の西(教生)先生に言われてイヌザンショウの葉を指で擦ってみました。すつと爽やかな香りがします。ビオトープに行つたあと、講義を受けながら手を顔に近づけるとまだ優しく香ってきます。教室という人工物に囲まれた場所に居ながら、その香りを染しめるのが嬉しく思いました。

ビオトープの手入れは定期的に行なわれています。しかしそれは整然と整った状態にするのが目的ではなく、チョウやトンボを呼ぶことや、山と山との仲介地となるようにすることが目的です。そのために人の手を入れるのは最小限に留めることにしているといえます。驚くことに、そのイヌザンショウも鳥が種を運んだものが根付き生長したものだそうです。イヌザン

ショウは、いまではもともとそこにあつたかのようにビオトープの一員となっています。名前を知って、どんなものかを体験すると、その前を通るたびに自然と目が行くようになりました。

ビオトープはいままでも変化して来た場所で、これからも季節ごとに、その年ごとに変化し続けて行くのでしょう。出える生きもの、体験できる感動や心躍る発見も少しずつ変わり続けて行くのだろうと思います。そう思うと、ただ通りすぎるだけの場所としてではなく、小さな出会いを積み重ねられる場所として通いたくなります。そしてそんな場所に少しでも近づき、一つでも新しい出会いに恵まれるなら、ビオトープの手入れに少しでも関わりたいと思うのです。

(べっふ さつき・国文学科2年)



鳥により芽生えをしたイヌザンショウ



ブッドレアに吸蜜に訪れたオオスカシバ

クルミひろいをする キャンパスにリスを呼ぶ会

■ 本田祐士

「キャンパスにリスを呼ぶ会」は、「ムリネモ（ムササビ、リス、ネズミ、モグラ）」観察の一環として、2010年に活動を開始しました。

台風一過の晴天の中、「キャンパスにリスを呼ぶ会」のクルミ拾いが行なわれました。北垣憲仁先生の案内で畑潤先生、事務局メンバーの4人で十日市場にある熊太郎神社にヒメグルミを拾いに行きました。神社の脇には近くから湧き出た湧水が小川となり、境内には高さが30メートル、樹齢100年はあると思われるクルミの大木がありました。その、富士山の溶岩を使った石垣の間には丸い小さな穴の開いたクルミの実がたくさんありました。アカネズミの食痕です。アカネズミは何代にも渡って同じ場所で食事をするそうです。そのため、毎年同じ場所で食痕が見つかるそうです。そんなアカネズミたちの食事場所がある神社です。

◇

地面に目を下ろすと、台風のおかげか、一面にクルミがたくさん落ちていました。クルミはデコボコだらけの堅い殻に覆われた茶色のものではなく、黒い果肉に包まれたものもありました。クルミは熟す前は緑色で、熟すと黒くなります。黒い果肉を中の殻を探るように触るとボロボロと落ち、中から真っ黒い果汁にまみれた堅い殻が出てきました。その殻を割ると、

お店で売っているようなクルミが出てきます。しかし、今回は殻を割らずに、殻のままや、果肉に包まれた状態のものを集めました。

1人1000個を目標に集め、1時間くらい拾っていると、あつという間に、バケツ3杯分、約3000個のクルミが集まりました。

集めたクルミは、人が食べるわけではありません。キャンパス内ではまだ見ることのないリスをキャンパス内に呼び込むためのエサになります。早ければ今年度中にも学内でリスが見られるようになるかもしれません。都留文科大キャンパス内でリスを見かけたら、ぜひ地域交流研究センターまでご連絡ください。

（ほんだ ゆうじ・本学職員）



「つるりん」(二号館裏の林)との出会い

■塚本真央

私は幼いころから外で遊ぶよりも家の中で遊ぶことが多く、ツククサやスギなどの比較的有名な植物の名前すらほとんど知りませんでした。キャンパス内外に緑の多い都留文科大学に入学しても、4年生になるまではそうでした。生物学実験という授業の中で、「つるりん」に生えている木の種名を調べる活動をしたことがきっかけで、植物について学ぶことが楽しくなりました。「つるりん」とは、一号館とグラウンドの間にある小さな林の名前です。600㎡ほどの小さな林ですが、その中には多種多様な生物が生息しています。植物のことに興味も知識もいまひとつだった私ですが、図鑑を片手に木の種名の同定を行ないました。最初は一つの木を調べるだけで何十分もかかっていましたが、だんだんどの部分に注目すれば見分けがつくかがわかってきました。また、本や図鑑を見るだけでなく、実際に植物の匂いや質感、味など、五感を使って植物の同定を行いました。苦勞して同定を行なったことで、その樹木に対する愛着が湧き、思わずその植物の名前を連呼してしまいました。

植物や動物のことに詳しく知らなくても、日常生活で困ることはほとんどないし、それらは生きていくのに欠かせない知識でもありません。ただ、植物や動物の名前や特徴などを知ること、日常生活には人の少しの彩りを加えることができると思います。例えば、道端である木を見たときに、植物について何も知らない人と知っている人ではその木に対する愛着や思いが全く違うでしょう。植物のことを全然知らない人にとっては、その木は何の変哲もない木に思えるかもしれません。しかし、植物の種類や体のつくりなどを知っている人は、その木の葉の形に注目するかもしれませんし、匂いを嗅いでみるかもしれません。私は植物の名前や特徴などを学んだことで、家までの帰り道やキャンパス内に生えている木や植物を、景観としての存在だけでなく、その植物単体で認識できるようになりました。

ある事柄について学ぶということは、ある事柄についての楽しみ方や、考え方を広げることだと思えます。学ぶことの楽しさは、自分の中の世界が広がっていくことにあるのかもしれない。

(つかもと まお・初等教育 学科4年)



中央に見えるのは「つるりん」にある小さな池です。この池にも様々な生き物が潜んでいます。



ケヤキの葉はまるでミノムシのような？愛らしい形をしています。

4号館前のケヤキの木です。ケヤキの名前はよく聞きますが、大学に入るまでどんな姿をしているのかわかりませんでした。



「田んぼクラブ」が学生主体の農業系サークル活動に転換して4年目を迎えました。近年では「一本植え」や「水苗代」などの意欲的な試みにもチャレンジしていますが、その一方で、稲を育てる活動は、田植え、稲刈りといった大きなイベントや草取りのとき以外は、ひたすら毎日毎日、その日の当番になった学生が責任を持って水見（水管理）をするという活動でもあります。それが「田んぼが日常の中にある生活」（初代学生リーダーの言）の実質だとも言えるのですが、サークル活動としては工夫や改善の余地がある部分かもしれません。その辺りを含めて、2年間続けて活動に参加している稲垣ほのかさんに報告してもらいました。

（西本勝美・本学初等教育学科教員）

2年間の田んぼ活動を通して

■稲垣ほのか

私は小学校の授業で田んぼに関わって以来、田んぼに関わることはしてきませんでした。ですから、大学の環境ESDプログラム実習の一環として田んぼクラブに参加したとき、小学校のときに抱いていた田んぼと、実際に自分たちで動いていかなければならない田んぼのギャップを感じました。人の指導のもと行なう活動と、各々が動いていかなければならない活動はまったく違ったのです。そのうえ、田んぼクラブの活動は地道です。みんなが集まることは少ないにもかかわらず、当番になれば水をいれたり、様子をみたりを一人で行なわなければなりません。そのため、自分で動くというより人に指示してもらって淡々と活動しているような気がします。それでも、お米ができたとき、自分の手にお米が入ってきたとき、「やってよかったなあ」という想いと、それにみんなで各々頑張ったからできたお米なんだと思うとありがたみがありました。田んぼクラブは、1年間とても地道な作業の積み重ねですが、頑張ったかいがあつたと思えるやりのある活動だと思います。

しかしながら、課題もあると感じています。それは、先にも触れましたが、活動の特性上みんなで集まる機会が少なく、全員が「自分たちで活動している」という意識を持ちにくいことです。そのため、他の活動も行なっている人はどうしてもそちらに傾きやすくなるし、やる気や熱意をもって入っても、地道な活動が続くとその熱意はしぼんでいきやすくなると考えています。また、代表者（学生リーダー）に頼りがちになってしまう傾向もあります。代表者の仕事は、日程決めと活動時の指導、当番決め等、他の人に割り振りにくい内容です。そうすると自然と代表者の負担も多くなつていきます。

このような状態を解消するためにも、私はみんなが仲良くなつて、チームワークを強めていくことが必要だと思っています。地道な活動でも、仲間とやっているという意識があれば、意欲をもって続けやすいと思うからです。現在、週1回お昼休みに、昼食をみんなで食べる会を開くなど行なっていますが、そういった会を深めていって、よりチームワークに磨きをかけていく

ことが今後の課題だと思います。地道で、メンバーの存在を感じにくい活動だからこそ、会う機会、交流することが大切だと思っています。

最後に、去年は間違つてうるち米ではなくもち米を育ててしまったので、今年はチームワークを強化しつつ、美味しいお米を食べたいと思います。

（いながき ほのか・社会学科環境・コミュニティ創造専攻3年）



播種：温湯消毒と催芽した種籾を撒きます。



田植え：もちろん手植え。やっと半分までできました。

畑で新たな挑戦

■ 前澤志依

都留文科大学から徒歩で20分ほどの距離にある中屋敷フィールドには昨年開墾した畑があります。昨年は畑でジャガイモやサラダミックスなどの作物を栽培しました。しかし、自分たちが収穫する前にイノシシやサルなどの生きものたちに作物を食べられてしまったことが度々ありました。このようすは仕掛けておいたセンサーカメラからも確認できました。

収穫が満足にできなかった昨年の反省をいかし、今年には畑で栽培する作物を一新してアイ、ベニバナ、ワタの3種類を育てています。アイとベニバナの種は、現在私たちが聞き取りをおこなっている都留市在住の遠藤静江さんから毎年収穫している種を分けていただき、ワタは取り寄せをしました。ジャガイモなどと違って食べものではないので、今年は畑を荒らされずに済むだろうと予想しながら4月中旬に種をまきました。

3種類の作物は4月下旬から順調に芽を出し始めました。いっぽうで、5月に入ると中屋敷フィールド全体で、イノシシと思われる生きものが掘った大きな跡を何箇所も見かけるようになりました。畑も荒らされるのではないかと心配をしていると、5月の下旬にベニバナをまいた畝の一部が掘り返されていました。対策として畑の回りにネットを張り、柵で囲います。また、生きもののように見られるように畑にセンサーカメラを設置しました。数日後にセンサーカメラを回収し、確認をすると、真夜中の時間帯に畑を荒らして

いるイノシシが写っていました。このまま芽を全部掘られてしまうのではないのかという不安もありましたが、もうしばらくようすを見ることにしました。

6月に入ると、畑にはイノシシと思われる生きものの足跡があるだけで大きな被害はなくなりました。このころにはベニバナが花をつけ始めていました。確認のためにセンサーカメラを確認すると、花がつくようになったベニバナにイノシシはほとんど興味を示さずに、畑を通り道として利用しているようです。

中屋敷でイノシシの姿をじつさいに見たことはありませんが、写真や足跡から私たちの近くで生活していることがわかります。このことは私にとつて、生きものをとても身近に感じるきっかけになりました。自分の目でその姿を確認することができなくても、生きもの暮らしを想像し、同じ場所を共有している事実を知ることができます。中屋敷フィールドの畑は植物を栽培するだけでなく、人以外の生きものが身近にいることを教えてくれる場所でもあり、どうしたら共生への道筋が築けるかを具体的に考える最前線の場所でもあります。

(まえざわ しより・国文学科4年)



中屋敷フィールドに設置した赤外線によるセンサーカメラに写ったイノシシ

記憶に導かれる地域探訪

■牛丸景太

「富士道」は、現在の大月市にある甲州街道との分岐点から、都留市・西桂町を経て、富士吉田市の北口本宮富士浅間神社へと至る道です。谷村路とも呼ばれ、富士山信仰が盛んだった江戸時代後期には多くの参詣者が往来しました。

「富士道を歩く会」では、昨年（2012年）5月から都留市郷土研究会の皆さんに案内していただき、この古道を辿りながら各所をたずね歩いていきます。今年の6月22日（第11回）には西桂町の手前、東桂の宝鏡寺までを歩き終えました。毎回3時間ほどを目安に歩き、道筋の変遷や集落の形成、寺社や民家の建築様式、現代の地図には載っていない地名など、さまざまなお話を教えていただいています。

なかでも私は、案内役の方々が語る「記憶」の数々を興味深く聞いています。都留市の仲町大神宮を訪れたさいは、おもに戦時中の話を聞き取りました。この仲町大神宮の界限は、かつては桜の名所として知られた場所だそうです。しかし、太平洋戦争中の食糧難の折に桜の古木は残らず伐採・抜根され、あたり一面はイモ畑に変えられてしまったといわれています。また、大神宮からほど近い場所にある護国神社の境内には、日露戦争の記念として機雷が置かれていた時期があり、巨大な鉄の塊が鎮座する様子がかかなり印象的だったようです。ほかに、知人が満蒙開拓団で大陸に渡った話や、壮行会で歌をうたった思い出など、当時の出来事

が次つぎと語られました。

食糧難から景色が一変した現場や、戦死者を祀る神社で聞く戦時中の話は、本で読むよりも直接的に訴えかけてくるものがあります。それはたんに場所が場所だからというだけでなく、言葉の一つひとつが語り手の見聞きした実体験に基づいていたからでしょう。大造り周辺に広大な田畑が広がっていたという話や、宅地造成などによって土地の高低差が変わったという話は、写真や地図から窺い知るよりも分かりやすく、説得力がありました。

長年この土地で暮らしてきた案内役の方々は、一度きりの史跡名勝めぐりでは捉えがたい個々の歴史や民俗を、みずからの経験として知っています。その記憶を共有することは、語り手の思い入れや感情なども含め、地域の一面を掘り下げて理解することにつながっているはずだと思います。残り少なくなってきた北口本宮に至る道の途中で、そうした一面にどれだけ多く出会えるか、また総じて何が明らかになってくるのか。期待と関心を寄せています。

「富士道を歩く会」については、『フィールド・ノート』74号、76号、77号、78号にも報告がありますので、ご参照ください

（うしまる けいた・国文学科4年）



第11回（2013年6月22日）、都留市夏狩。八面神社の鳥居は、色や形が特徴的



第9回（2013年4月27日）、都留市田原。富士道は、現在の国道139号線と重なる部分が多い

きつかけを掴む旅

■ 崎田史浩

「富士道を歩く会」が始まり1年半が経った。出発点の大月追分から、終着点の富士浅間神社まで、車を使えばおよそ1時間の距離である。ただ歩くだけなら、1日あれば十分だろう。私たちの「富士道を歩く会」は、歩きたび随所に現れる神社仏閣、旧道の跡、石仏、地名、伝承などにじかに触れていく「旅」のようなものである。富士道に沿って、地域を旅する、それが私たちの「富士道を歩く会」だ。1年半かけて、ようやく全旅程の3分の2ほどを消化したところである。

「富士道を歩く会」の魅力は2つある。ひとつは、道中を都留市郷土研究会の先生方に直接案内していただけることである。土地の来歴や地域の事柄など、長年そこに暮らしていた先生方から教わることはたくさんある。ときには、先生方の何気ない昔話が、私たちが地域の歴史を考えるとつかかりとなっている。

そして、もうひとつの魅力は、「歩く」そのものである。「富士道を歩く会」は、富士講が歩いた道を通るなかで得られる発見や気づきが、大きな意味をもっているのだ。私自身、富士道を歩くなかで、あまり意識したことなかった小字（地名）の多さにはたと気づいたり、富士山に向かいながら少しずつ変化を見せる地理や町並みを肌で感じたりするなど、毎回の歩きが学びとなっている。

内藤恭義先生をはじめ、郷土研究会の先生方は高齢でいらっしゃるにも関わらず、道を先導していただ

き、また、事前にコースの手配もしていただいている。本当にありがたいことである。以前、内藤先生は、私たちが川の流れによって分断されていた集落とそれを結ぶ橋について興味を持って追加取材をした際に、「参加した皆さんが、そうして何かを掴んでくれれば嬉しい」と仰ってくださった。ゆっくり歩くからこそ、何気ない発見に浸れるものだ。何年かけてもいい、大学を卒業した今も、まだまだ富士道を通じて掴みたいことが沢山ある。そして、富士道を最後まで歩き続けたい。そうすれば、地域を見つめることの楽しみをもっと具体的に深めていけると確信している。来年以降には「富士道を歩く会」で教わったことや感じたことを、ひとつの記録集としてまとめあげていきたい。

(七喜た ふみひろ・本学卒業生)



第3回（2012年7月29日）、都留市田野倉にて。船場橋でお話を伺う



第11回（2013年6月22日）、都留市夏狩。道祖神などの石造物は道歩きの日印

子どもの目を想い起す

—自然観察会を通して感じたこと—

■篠原円香

2013年6月9日、都留文科大学前駅に9時に集合し、都留文科大学前駅から大学の裏山までをコースとした第1回自然観察会を行いました。

この自然観察会のために、事前に下見を行ないました。思っていたよりも距離が長く暑かったので、当日多くの子どもが参加する予定であるということ聞き、大丈夫かなと少し思いました。そしてこのコースには、私は知っている植物よりも初めて名前を聞いた植物が多く、知っている植物の方が多い、知っている植物については、その植物に対しての知識等が浅いのでちゃんと説明できるのだろうか、という不安もありました。

その一方で、初めて出会う植物があったり、普段はあまり触れることのないような植物に触れたりしていくうちに、だんだんとおもしろいと思うようにもなりました。たくさん植物がコース内にあることを知り、その中でも特にビロドモウズイカという植物が、大きなものでは2mの高さにまで成長するというところに興味をもちました。そして、このことを子どもたちに説明しようと思つた。どのようしたら伝わりやすく子どもたちが飽きずに説明を聞いてくれるのかを考え、画用紙を貼り合わせて2mの大きさにし、そこにビロドモウズイカの絵を描きました。

自然観察会当日。しっかりとできるのだろうかという不安な気持ちが半分、どんな観察会になるのだろうかという楽しみな気持ちが半分でした。子どもたちは観

察会が進むにつれて、だんだんいろいろな葉や花に興味を示すようになっていて、私たちが説明した以外の植物にも触れたり、それらの名前を知ろうとしたりしていました。この様子を見ていて、子どもが自然に対しておもしろいな、何だろうな、と自然に興味関心をもつ気持ちを大切にしていきたいなと思いました。私も子どもどきどきに、いろいろな植物を見たり触れたりして、おもしろいな、不思議だなと思ひ、よく図鑑を眺めていたことを思い出しました。そして大学生になった今、自然に対して子どもどきどきのように全身で、全力で夢中になるということが少なくなつてきていると感じ、それはひよつとしたら、私だけのことではないのではないかと思ひました。私たちの周りにはたくさん動物植物が存在しています。子どもどきどきにはそれらを見つけて観察しようとする目をもつていたのかもしれないですが、だんだんと子どもどきどきと同じような視点で私たちの周りの自然を見るものがなくなつてきてしまつていないでしょうか。

私はこの自然観察会を通して、子どもの視点で自然を見てみると、今まで目に入つてこなかった動植物が

見えてくるような気がしました。これからの自然観察会では、自分が子どもだったらどんなことに気づくのだろうか、ということも考えていきたいと思ひます。

(しのはら まどか・初等教育学科2年)



観察の楽しみ

— 体験で自然を感じる —

■ 杉山 圭

今回の自然観察会（7月27日）は、大学から近く、今の時期はアジサイがともきれいで、虫の観察にも適している楽山を周ることになった。私自身こんなに近くにあるのにあまり行つたことがなく、この機会に楽山を歩いて、楽しみたいと思った。

観察会の一週間前に下見をした。遊歩道を囲むように咲いているアジサイ、ホタルブクロやジグモの巣、木にとまっているセミやカミキリムシなどさまざまなものを見ることができた。また、歩いている途中にセミの抜け殻を見つけた。私知っている抜け殻とは違い、ひとまわり小さかった。それはヒグラシの抜け殻だった。ヒグラシの鳴き声を聞いたことはあるが抜け殻を見たのは初めてだった。その後先生が、殻に泥がついているのが特徴のニイニゼミの抜け殻も紹介してくださった。ニイニゼミの抜け殻を見るのも初めてだったので、新しい発見となった。私たちはセミに興味をもち、本番でセミについての紹介をすることにした。

私も子どもたちと夢中になって探した。四葉を11個も見つけている子がいて、とても驚いた。そして、楽山の入口に移動し、セミの紹介をした。子どもたちに抜け殻を渡すと興味津々に観察してくれた。そのあとアジサイの紹介があり、大人の方々はとくに見入っていた。楽山では、トラップにかかったカナブンやカミキリムシ、コクワガタ、カブトムシなどさまざまな虫を観察、採集することができた。また、オオムラサキも間近で観察することができた。貴重なチョウに触れることができたことは、参加者の方だけでなく私たち学生にとっても良い経験になった。最後に、自分たちが見つけた草花でしおりを作った。参加者の皆さんが夢中になって制作していて、楽しんでもらえていると実感できた。

今回の自然観察会では、体験のできるプログラムがたくさん企画できた。参加者の方だけでなく、私自身とても楽しく夢中になって自然観察会に参加することができた。五感をつかったアクティビティの提供ができたことで、充実した自然観察会になったと感じる。また次回も秋ならではの体験を含む観察会を企画したい。

（すぎやま けい・初等教育学科2年）

自然観察会当日、最初は本部棟前広場に行き、シロツメクサで冠を作ったり四葉のクローバーを探したり



森のなかでの環境教育

都留文科大学附属小学校

小口尚良

附属小は校舎のすぐうらが自然豊かな森になっていて、校舎の窓からリスやムササビなどの野生動物を観察することができます。また、学校林もあり、そこでは、間伐や植樹などの林業体験もできます。附属小では、1年生から6年生まで教育課程の中に森での体験活動が位置づけられていて、学校のうら山や学校林で森に親しんだ子どもたちは、学校林に広葉樹を植樹して卒業します。

各学年での活動は左の通りです。

- 学年 主な内容
- 1年生 10月に学校林で自然体験（ネイチャーゲーム等）
 - 2年生 5月に学校のうら山で自然体験（ネイチャーゲーム等）
 - 3年生 11月に学校林で自然体験（フィールドサイン等）
 - 4年生 動物観察・通年で学校のうら山で、動物との出合いの場所整備・観察
 - 5年生 11月に学校林で林業体験（間伐等）うら山で椎茸栽培
 - 6年生 11月に学校林で林業体験（植樹等）

講師は、都留文科大学北垣憲仁先生、ネイチャーゲームの会高山弘さん、権藤みどりさん、森林組合小林卓

也さんにお願ひしています。（今年度）
上記のように6年間を通して身近な自然に触れながら、学習を深めていくのですが、とくに4年生では、北垣先生指導のもと、年間6回かけて、学校のまわりに動物たちが訪れる環境を作り、餌付けや整備を日常的に行ない、全校児童が野生の動物たちを見ることができるようにと取り組んでいます。

今年度の活動内容

- 5月 うら山の散策
- 6月 ヒミズの観察装置メンテナンス
- 7月 リスの通り道メンテナンス
- 9月 クルミ拾い
- 10月 リスの観察
- 11月 ムササビ巣箱かけ まとめ
- 12月 ムササビ観察（希望者）

これまでの活動の成果として観察が可能になっているのは、リスとムササビです。リスは、午前中に活発に活動するので、休み時間に窓から外を見ると、エサ台でひまわりの種を食べているところや、クルミを運んで行く様子を見ることが出来ます。ムササビは、昼間でもときどき巣箱から顔を出しているのを見ることが出来ます。アカネズミやヒミズ（小さなモグラのなかま）の観察装置もありますが、いつでも観察でき

るところまではいっていません。

他にも、玄関を入ったところに、「森の博物館」と名付けたスペースを設け、うら山や学校のまわりの自然の紹介を、実物（4年生が作成した展示品）や写真、クイズを使って行なっています。全校児童は、関心をもってクイズに挑戦したり、自分がみつけた生きものの情報を持つてきたりしています。

このように、ご近所さんの森となかよく付き合う学校づくりが進んでいます。

（おぐち ひさよし・都留文科大学附属小学校教員）



うらやまに出かけよう

〜都留文科大附属小学校〜

■原田裕太

「附属小のうらやまにリスとかムササビとか小鳥の仲間が増えて、えさやり場にたくさん来てほしい。」

学校の裏山が動物観察の場として整備されてから3年目の春を迎えました。うらやま動物観察の学習を前年度から引き継いだ4年生は、校舎の裏につくられた観察スペースに動物が来るのをとても楽しみにしています。

子どもたちは、なかなか出くわすことがないうらやまに住む動物たちをいつでも待つているようです。週の3回のえさやりのときに、えさはどのくらい食べられているか？昨日までと変わったところはないか？動物が来た跡はないか？など、えさやり場とその周辺を観察します。そして、えさやりの仕事の後に、「今日はクルミがなくなっていたよ。」「観察窓にヒミズ（モグラの一種）の新しい穴が開いていた。」などと報告してくれます。

4年生はえさやり場の管理と動物観察を担当しながら、身近な動物について学んでいます。子どもたちが整備したリスの道（間伐した木材で作った丸太の道）を通ってリスがクルミをくわえに来るところをたまたま目撃することもありました。また、裏山の木に設置された巣箱にはムサ



サビも住み着いていて、ときどき昼間でも顔を出すことがあります。しかし野生の動物は夜行性のものも多く、基本的にはそう簡単に姿を見せてはくれません。ですから子どもたちは、動物がそこに来た痕跡を探すことに観察の多くの時間を費やすことになるのです。都留文科大の北垣憲仁先生には、毎年附属小に来ていただき、動物観察について教えてもらったり、一緒に活動してもらったりしています。「うらやまを歩いて足跡とかいろんなものを探したのが楽しかった。」

そのときの授業を振り返っての子どもの感想です。「クルミを拾ったのがたのしかった。」

子どもたちはうらやまでの活動が大好きです。

「リスを見たのが楽しかった。」

実際に動物に出会うことは子どもたちにとってかけがえのない経験です。また、屋外で活動することはそれだけでわくわくすることでしょう。

しかし楽しいことだけではありません。休み時間にも仕事が待っています。小学4年生にはきつ

い力仕事をすることもあります。「うらやま整備の丸太を切るのが大変だった。あと、階段を作るのが大変だった。」

「中休みにエサやりをするのが大変だったけどがんばった。」

地道な活動を続けて、子どもたちの期待はますます膨らんでいるようです。

「アカネズミを見てみたい。ムササビにもっと顔を出してほしい。」

どんな動物との出会いが訪れるのか、わたしもこれからが楽しみです。とても恵まれた環境のなか、今年も子どもたちの「うらやまどうぶつ観察」の取り組みは続いています。

(はらだ ゆうた・都留文科大附属小学校教員)



地域における表現活動に参加する

図工・美術教室の新たな取り組み

■鳥原正敏

これまで初等教育学科図工・美術教室では美術教育研究会（地域の先生方との勉強会）を中心として活動を行ないながら、昨年度は山梨県立美術館との共催によるワークショップ「アート巣箱を作ろう」を開催しました。本年度はこれに続き、以下の二つを新たな取り組みとして行ないました。

1 「つるの宝かるた」製作への参加

本年3月に都留青年会議所から、まちづくりの一環として先人たちが残してきた都留の文化的財産や宝を子どもたちへ伝えてゆくことを目的とした「つるの宝かるた」を製作すること。都留の宝を題材とした読み札を市内小学生から募る予定であること。その絵札の原画を、本学図工・美術教室の学生に描いてほしいとの依頼を頂きました。当初、教室では制作期間が短いこと、制作点数が多いこと、他の研究活動と同時進行となることから参加に慎重でした。しかし、かるたの製作に参加することは学生にとって地域の歴史や文化を学ぶ機会となること、なによりも都留で過ごした大きな記念となり、文字通り学生にとっても宝となりうることを考えて、参加を決めました。

原画の制作過程では、スケジュールの管理、画材の選定、描画法の統一、入稿データの作成など、多くの課題に直面しましたが、これらを手探りで解決しながら作業を進めました。作例の制作では、教室所属の

先生方にもご協力頂きました。制作には教室の2年生から4年生まで、学生33名が参加しました。学生一人一人が、子どもたちの書いた読み札から発想し、その思いを感じながら制作していました。

これらさまざまな制作過程を通して、図工・美術教室の学生が地域の文化や歴史に触れながら、改めて都留の魅力を知ることができたことは大きな収穫であったと思います。8月28日、市役所で行なわれた読み札の優秀作品に対する「特別賞授与式」にも図工・美術教室の学生3名が参加し、プレゼンターとして副賞の都留文科大Tシャツを手渡すなど、参加した子どもたちと直接かかわることもできました。

この活動を通して、学生が地域と積極的に関わりをもつなかで、つるの宝と学生生活の思い出が重なって、地域の文化や歴史に深く共感した様子が印象的でした。完成した「つるの宝かるた」が、永く地域で愛されることを願っています。

2 宝保育所の造形教室

本年6月頃、『都留市立宝保育所』から『都留市まちづくり交流センター』を通じて図工・美術教室に、造形教室への講師派遣依頼を頂きました。この取り組みは月1回のペースで、宝保育所の活動の一環として行なう造形教室に学生が講師となり、企画運営に携わるといった内容でした。

窓口となった私の率直な気持ちは、学生の専門が初等教育であるため少々不安に思いましたが、所長や保育所の先生方がサポートしてくださるとのことから、思い切って教室の学生に相談してみました。すると保育に興味をもつ学生など、意識の高い学生がたくさん集まりました。その後、学生と我々教員で保育所にお邪魔して保育所の様子を確認しながら打ち合わせを重ね、学生が主体的にプランを検討し、7月10日に第一

回目の活動を行いました。ここでは年長組を対象として約252×356cmの巨大な画用紙を使って「おきな絵」を描きました。あいにくこの前後、私には別の予定があったため学生のみで準備と活動を行いました。私も途中から保育所の様子を見に行きました。学生が子どもたちと積極的にコミュニケーションをとっている様子や、子どもたちが画面の中に入り込んで制作に熱中する様子が印象的でした。また、教室の外から見ていた年中・年少組の子どもたちからは「すごいな!」、「私もやってみたい!」といった嬉しい言葉が聞こえました。参加した学生にとって、こういった子どもたちとの心の交流が将来の大きな力となると感じました。

この取り組みはまだ始まったばかりで、今後も続きます。この活動が、参加した保育所の子どもたちにとって、楽しい思い出になればと思います。また、この取り組みを通して本学学生が、子どもたちをより深く理

解すること、地域社会と関わりをもつなかで人格的にも更に成長することを期待しています。



我々教室が地域交流研究センターを通して活動するようになって、今年で2年目となりました。少しずつではありますが、学生も積極的に地域へ関わろうとしています。図工・美術という「作る」ことが目的と考えられがちです。しかし、完成した作品を含め、表現・鑑賞の活動を、「共感」を目的とした心のコミュニケーションと考えるならば、我々図工・美術教室にとって、大学を飛び出して地域のなかでさまざまな



つるの宝かるた
取り札㊸原画
『お八朔祭り』
*裏表紙にカラーの
写真があります



つるの宝かるた
取り札㊹原画
『山本美香さん』



つるの宝かるた
取り札㊺原画
『都留文科大学』

方々と関わりながら活動することには、大きな意義があると思います。今後も我々は、地域の中で積極的に活動を行なっていきたいと考えています。

(とりはら まさとし・本学初等教育学科教員)



つるの宝かるた
取り札㊻原画
『法能神楽』



つるの宝かるた
取り札㊼原画
『玉川公園』



宝保育所年長組と作品の前で

谷ニラボ続いていきます！

■ 山森美穂

地域交流センター通信21号で報告させていただいた「谷ニラボ」（II谷村第二小学校で子どもたちと小学校教員を目指す大学生と一緒に理科実験をする活動は、3年目になりました。

昨年度は、「スライム」「紫外線く色が変わるビーズで工作」「砂糖水の虹」というテーマで3回行ないました。また、南都留地域教育フォーラムで、4年生の5人が谷ニラボの活動について発表する機会もいただき、谷ニラボの知名度もアップしました（?）。

今年度のスタートは夏休みからとなりました。「ひんやりする実験」（8月1日・1〜6年対象）では、瞬間冷却パックなどまわりから熱を奪う反応を主に扱い、大盛況でした。「充電池のしくみ」（8月5日・3〜6年対象）では、重曹と鉛の板を使ったバッテリーの実験をしました。このテーマはあまり子どもたちの興味を惹かなかったのか参加者は少なかつたのですが、その分大学生と小学生が密に関わって実験を進めることができました。学生の感想をご参照ください。

さて、昨年度谷ニラボに熱心に取り組み、いまは小学校に勤務している元学生が、夏休み中にたずねてきてくれた際、嬉しい報告をしてくれました。「小学校で、理科実験クラブの顧問をしています！」

（やまもり みほ・本学初等教育学科教員）

楽しさのその先へ

■ 石川温子

「ひんやりする実験」では、全学年が興味を持って、1年生でも安全に行なえる実験を設定することに一番こだわりました。全員が楽しそうに実験をしている姿が印象的でした。しかし、今回の本当の目的は私たちの身の回りの生活にも化学が役立っているということ学び、化学をもっと知りたい、面白いと思ってもらうということでした。一人でも多くの児童が、さらに生活のなかの化学について興味をもち、自由研究などの機会を通じて深めてくれることを願っています。

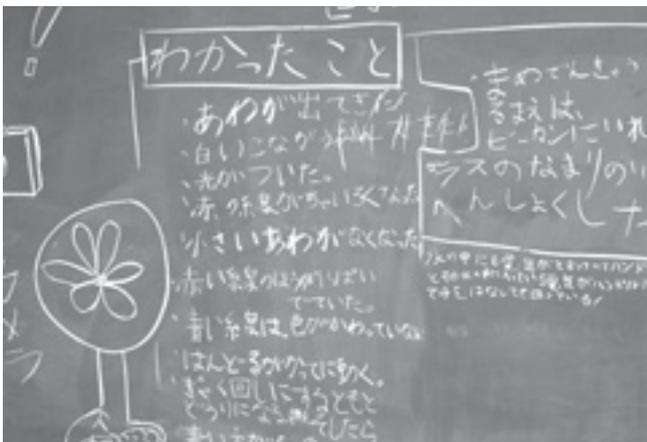
（いしかわ あつこ・初等教育学科4年）

試行錯誤する姿

■ 木村盛貴

「充電池をみんなで作ってみよう」というテーマで材料や器具を組み合わせ、装置を作りました。子どもたちはどうすれば多くの電気をためることができるのか、何回も実験し、充電・放電にともなう細かな現象まで観察していました。子どもたちが協力しながら進んで取り組んでくれたのが嬉しかったです。また、好奇心のパワーを感じることができ、私にとっても有意義な実験教室になりました。

（きむら もりたか・初等教育学科4年）



みんなが気がついたこと（充電池のしくみ）



2種類の粉末状薬品を混ぜて、水を垂らすと…（ひんやりする実験）

写真織りに出会う——大学発の特産品への挑戦——

■ 吉住典子

10年ほど前から文大にも大学発の特産品ができたらしいなど感じていました。それは元学長の金子博先生が当時入試委員で事務室にいた私に雑談で、「大学発の特産品として何かできないかな?」と話を持ちかけてきました。その時の私の返答は「そんなのできる訳ないじゃないですか」でした。でも頭の片隅にそれが残っていました。

その後、食育会議関係で地域の人と知り合う機会が増えました。また、都留市は郡内絹織物の中心地です。担当している「日本研究1」の留学生に織物工場の見学体験をしてもらうために、リード社(谷内社長)を食育会議関係の市役所職員から紹介してもらいました。そのとき初めて写真織りに遭遇しました。それは、図柄が富士山を中心とした景色の写真でした。谷内社長は生涯研究として、写真織りを自分の手で開発したい旨の話をしてくれました。私は是非とも、その企画に参加して大学の建物の写真を織物製品にしたいと考え、共同研究を申し出ました。

現在の郡内織物はネクタイが中心です。国内生産高の約40%を生産しています。原料は絹です。織機はジャガード織機です。ジャガード織機は紋紙で複雑な模様を表します。穴の有無に従って上下する金属針とシャフトを連動させてシャフトを個別に上下させ、穴によって指示された経糸だけを引き上げて横糸を通して、カードのパターン通りの模様を織ります。ネクタイの

幅は12・5cmまでです。織機もその専用機械になっているため、小物作成で名刺入れとしました。現在は紙の代わりにコンピュータデータとなっているが、写真をコンピュータデータにするためには、8色のビットマップに変換する必要があります。その仕様は特許が取られており、特許をお持ちの広島大学の中野浩嗣先生に作ってもらいました。それを元に工夫を重ね、織物はできたのですが、それを製品にすることが大変でした。ミシンで縫うと布地なので、縫い目が波打ってしまうのです。編み目接着剤を用いて接着しました。ところが、手作業で馴れてきても最大4個/日しか作ることができません。

試作品はできあがりしましたが、量産するために形や名刺入れ以外の製品を考える必要があります。

(よしずみ のりこ・本学名誉教授)



*裏表紙にカラーの写真があります



夏休み昆虫写真展
2013年7月19日～8月31日
都留市立図書館閲覧室

フィールド・ミュージアム部門と都留市立図書館の連携事業として、これまで「谷の町・史の里展（シリーズ展）」ほかさまざまな企画展示、読書週間行事などを実施してきました。今夏は、久々の夏休み企画として市立図書館で「夏休み昆虫写真展」を開催しました。

「夏休み昆虫写真展」を企画・開催して

■古屋 知美

7月19日から8月31日、都留文科大学フィールド・ミュージアムが撮影しパネルに仕立てた昆虫写真を市立図書館の蔵書と共に展示する「夏休み昆虫写真展」を開催しました。

この企画は、館内3ヶ所に4つのコーナーを設け、それぞれに関連した昆虫観察の本や図鑑、児童向けの読み物などを写真パネルと一緒に展示し、子どもたちの自然学習に対する関心をよぼうとするものです。

まず閲覧室には、カブトムシやクワガタ、セミなど「身近な昆虫」、まわりの植物に擬態している昆虫を集めた「擬態ってなあに？」の各コーナーを、さらに動植物の本が並んだ児童書架には見たことがないような「めずらしい昆虫」のコーナーを、そして山側の窓辺には「オオムラサキ」コーナーを設けました。

メインの展示とした閲覧室の中央テーブルでは、親子でパネルを覗き込み、擬態している昆虫を指差す光景や、カブトムシのパネルを見つげそこに並べたカブトムシやクワガタの本を借りていく子どもたちの姿をたびたび見かけました。友達と一緒に昆虫を題材に自由研究に取り組んだ小学生もいました。めずらしい昆虫の写真には大人も目を見張りました。

展示の工夫として、特定の展示スペースだけでなく児童書の書架の上にもパネルを置き、子どもたちを書架に誘うことで、図書館には夏休みの自由研究や調べ学習に利用できる本がたくさんあることをアピールしました。さらに、図書館のうら山（白木山）が間近に見える窓辺（私たちが「森の窓」と呼んでいる）には、

ムササビや毎年そこで羽化したオオムラサキが見られることにちなみ、オオムラサキの幼虫から成虫まで成長過程がわかる写真パネルを並べ、臨場感を味わえるよう工夫しました。

また、フィールド・ミュージアムの活動を紹介する解説や、『フィールド・ノート』を置き、都留大生の地域交流や研究活動のようすを伝えました。

「夏休み昆虫写真展」は初めての企画でしたが、夏休みの図書館の利用促進にも大いに繋がる展示となり、今後ともフィールド・ミュージアムの皆さんと共に工夫して続けてゆきたいと思っています。

（ふるや ともみ・都留市立図書館司書）



森の窓 ～森がつなぐフィールド・ミュージアムと図書館～



「夏休み昆虫写真展」より オオムラサキコーナー
窓の向こうに写る石垣は、小俣晃造さん（朝日會社、故人）が昭和40年代末に積んだもの。小俣さんの石垣は今も市内外に残る。堅牢かつ美しく自然に調和した熟練の技。

市立図書館の閲覧室からは四季折々のうら山の自然が観察できます。（『センター通信』No.8、「森がつなぐフィールド・ミュージアムと図書館」）また、この白木山はかつて、日本でも早くからスキー場として利用される（大正～昭和）など地域の記録に残すべき歴史的な場所でもあります。都留市立図書館では、今後この窓辺を都留大フィールド・ミュージアムに常設展示スペースとして提供し、季節ごとの展示をしていただけたらと考えています。

「ミュージアム都留」との連携事業

わたしとあなたの都留アルバム事業から考えること

■森屋雅幸

前号でもご報告させていただきましたとおり、現在、都留文科大学地域交流研究センターとミュージアム都留は連携し、市内の写真とそれにつわる記憶を収集・保管する「わたしとあなたの都留アルバム事業」を進めております。本事業を開始して1年以上経ち、皆様のご協力のおかげで、9月末現在までに777点の写真をも市民の皆様からご提供いただきました。この場をお借りして感謝申し上げます。

さて、本事業を進めるなかで市民の方々から写真をお預かりし、写真につわる記憶を聞き取るなかで、こうした記憶はいずれも、主観的であるにせよ、古文書などに記述された客観的な歴史で語り得ないものを多く伝えるものであることを実感しました。また地域の歴史は、記述として残されているものはごくわずかしかなく、記述に現れない本当にささいな出来事、いわば「小さな物語」は、いまだ膨大に人々の記憶として地域に埋もれているのではないかと考えるようになりました。

そして、写真にまつわるひとつひとつの「小さな物語」は、非常に儂いものであり、意識して記述として残さなければ、完全に消滅してしまうということを、この事業をとおして改めて思い知らされました。

いくつか写真をみていきましょう。写真(1)は小野の真福寺でおこなわれた「お稚児さん」と呼ばれる行事を昭和32年(1957)頃、撮影したものです。

またこの写真には「息子が白足袋をはいて、履きなれず怖くてゆっくり歩いていたのを覚えている。」という、提供者のお母様からお話を伺うことができました。

写真(2)は、昭和28年(1953)、羽根子からつる五丁目方向(現都留市立病院)を撮影したものです。撮影者の方がまだ、中学を卒業したての頃に撮影したもので、将来開発が進み、この景色が無くなってしまふという危機感でこの風景を選択したとのことでした。このカメラはweimyl6という昭和28年(1953)に大成光機(戦前の富士光学)で製造されたもので、当時、カメラは高価で手に入らなかったものの、カメラを趣味にしていた勤め先のご主人が撮影者の方のお給料から少しずつお金を積み立ててくれて、ある日ふいにこのカメラを渡されたといえます。

こうしてみても、写真1枚には、聞き取りをしなれば、すぐに消えてしまふそうだけれど、撮影者や提供者の方々にとつて、とても大切に私たちにとつては、温かな「小さな物語」が含まれていることがわかります。この事業は断片的な記憶を集めて、地域の人々の「小さな物語」を再生させていく営為といっても良いかもしれません。写真は随時募集しておりますので、今後ともご協力をお願いいたします。

(もりや まさゆき・都留市教育委員会学字ひのまちづくり課

文化振興担当)



写真2・羽根子からつる五丁目方向(現都留市立病院)を撮影したもの。昭和28年(1953)撮影。



写真1・真福寺でおこなわれた「お稚児さん」と呼ばれる行事。昭和32年(1957)頃、撮影。

【資料紹介】

都留をフィールドとした共同研究がさまざまに進んでいますが、その一つを取り上げます。誌面スペースの関係上、論文の「1. はじめに」のみを紹介し、なお該当箇所『注および引用文献』はやはりスペースの関係上略述した部分があります。

「研究ノート 都留市十日市場における食資源調査の試み

―地域再生のための研究アプローチの検討と実践―
西丸 堯宏・泉 桂子・北垣 憲仁
林業経済 Vol.66 No.4 (No.777 2013年7月)

西丸 堯宏(東洋美術印刷株式会社)
泉 桂子(都留文科大)(現所属:岩手県立大)
北垣 憲仁(都留文科大)
キーワード:食資源調査、山梨県都留市、地元学、結城登美雄

1. はじめに

1990年代以降の第1次産業の苦境、加えて平成の大合併による広域市町村の出現により、農山村、特に日本の国土の約8割を占める中山間地域は厳しい現実に直面している。本稿の対象とする都留市も典型的な中山間地域であり、本稿ではその中山間地域における農の営みに着目する。この地域における、基幹産業である農林業の衰退、野生動物と農作物をめぐる軋轢、コミュニティ機能の弱体化などをすでに多くの識者が指摘している。これに応えるように「地域再生」の議論が盛んである。ここでは本間(2007)1)、大

江(2008)2)、小田切(2009)3)らが述べているように、地域の主体的意志決定や地域資源後述)の活用などがキーワードとして取りあげられている。

筆者のうち北垣は2000年前後より、中山間地域である都留市内を主な対象地として「都留文科大フィールド・ミュージアム(以下、都留文大FM)4)に取り組んできた。これは「もの本来の生きた姿に接することのすばらしさを伝える自然博物館」という理念のもと、「地域の人々が自然との交流のなかで培ってきた知恵と文化に学び、その文化環境の復活を目指す」一連の活動である。この活動は地域の自然や文化、生活風習や仕事場などをそのまま保存しながら、展示・見学する「エコミュージアム」や従来の自然消費型の、いわゆるマストツーリズムのあり方に対する反省から出発した「エコツーリズム」とも重なる5)。都留文大FMでは、キャンパスを自然に親しむ人口と位置づけ、自然観察会や、地域の人々の知恵に学ぼうとさまざまな聞き取りを行ってきた。ほかにも市民が撮影した戦前期写真コレクションのアーカイブ化など、市民の記録や記憶の収集にも努めている。また、その一連の経験を地域で共有するため、機関誌「フィールド・ノート」の編集・発行を実践している。これらは、地域の自然環境、それを取り巻く人の暮らし、文化の情報を記録・蓄積し、共有していく試みである。

この都留文大FMの一環として、北垣は十日市場周辺での里山環境調査を継続的に行なってきた6)。一般的に里山が生物多様性に重要な役割を果たしていること、特にわが国において里山地域などの二次的自然に依拠する生物種の多様性が減少していることが指摘さ

れている7)。北垣のこれまでの調査により、十日市場周辺では「里山環境」が適度な手入れによって良好に維持されているとともに、十日市場に代表される都留市湧水群地域の生物多様性は地域住民の農の営み8)と強く関係することが明らかになった。予察的データであるが、生物多様性と農の営みの関係の一例として、西丸(2011)6)では休耕田面積とヒバリ出現個体数との相関、ミズカケナ栽培畑におけるタヒバリの出現が観察された。そこで本稿では、都留文大FM活動における聞き取り調査、湧水地域の里山環境調査との接続性から、特に農の営みとその生産物に着目した。

注および引用文献

- 1) 本間義人(2007) 地域再生の条件、岩波書店:63-92、155-187。
- 2) 大江正章(2008) 地域のカ・食・農・まちづくり―岩波書店:ii-iii。
- 3) 小田切徳美(2009) 農山村再生―「限界集落」問題を超えて―、岩波書店:18-45。
- 4) 北垣憲仁(2011) 都留・フィールド・ミュージアム―地域づくりと文化の営み―月刊社会教育、670:38-43。
- 5) エコミュージアムやエコツーリズムは地域外からの観光客等との交流を重視している。これに対し、都留文大FMでは市内の人口3万3,000人、大学関係者が3,000人を占める地域の特性に着目し、地域と大学との相互交流・学び合いに重点をおいている。
- 6) 渡邊通人・北垣憲仁(2008) 都留市湧水群地域における「里山環境」の総合評価に関する研究(1)〜(4)「都留文科大研究紀要」67:71-73、74。
- 7) 例えば、髯谷いつみ・鬼頭秀一編(2007) 自然再生のための生物多様性モニタリング。東京大学出版会:24。
- 8) 本稿では農産物の販売を行なわない自給的な農産物の生産と利用、それに付随する水・土壌などの地域資源利用を「農の営み」と呼ぶこととする。

私の故郷のいよゝ 3・11と遠野市

■ 菊池 萌

四方を緑深い山々に囲まれた、豊かな自然と伝統が今もなお息づく民話の里。そんな岩手県遠野市で私は生まれ育ちました。柳田國男が手がけた『遠野物語』の舞台であり、訪れる人々を魅せてやまない、穏やかで美しい町です。民話の里として知られるこの故郷遠野について、今回はまた違った視点から紹介させていただきます。

2011年3月11日14時46分、東日本大震災発生。誰もが忘れ得ないこの瞬間の直後から、遠野市は後方支援の一大拠点として機能し続けてきました。内陸地域と沿岸地域の中間地点に位置しており、沿岸地域へ車で約1時間足らずで行ける地理的条件をいかして、内陸と沿岸を結ぶ、物や人、情報が集まって行き交うHUB（ハブ）としての役割を担っているのです。

遠野市民を中心に、東日本大震災で被災した岩手県沿岸部の被災者の方々を支援するべく結成された「遠野まごころネット（遠野被災地支援ボランティア）」の取り組みについて紹介したいと思います。遠方からのボランティアをいち早く受け入れた団体としても知られているこの遠野まごころネットは、全国から災害ボランティアスタッフの募集を随時行ない、遠くから来たボランティア団体の宿泊施設も市内に設けています。活動内容としては、ガレキの撤去・清掃など被災現場の環境を整えることや、被災者の心のケアを目的としたさまざまなイベントの企画など多岐にわた

り、復旧復興の段階、各地域の特性、ニーズ等に合わせ、活動は移り変わってきています。

現在では沿岸地域のコミュニティ農園での農作業、建築補助・修繕、イベントの開催・サポート等々幅広い活動を展開しています。また、2011年12月に遠野まごころネットの東京事務所、2012年の6月には関西事務所も設置され、被災地のさまざまな情報を集めて発信するとともに、企業・団体・個人ボランティアの方々が交流できるスペースを提供しているようです。このように市内・県内のみならず、全国的にも活動の幅を広げています。

遠野まごころネットの、遠野市民や岩手県民だけでなく全国から個人や団体のボランティアを募り、共に活動し続けようという姿勢は、震災を風化させないという点にも繋がると考えます。遠野だからこそいち早く後方支援に尽力出来たことを誇りに持ち、遠野だからこそ出来る今後の後方支援のあり方について期待すると共に、私自身も活動に携われる機会を設けていければと思います。

(きくち もえ・社会学科現代社会専攻3年)



釜石市鵜住居地区における被災状況 調査の概要について

■高田 研

2011年3月11日の東日本大震災に対し、本学ではこれまでボランティアサークル「バーサス」を始めとする学生によるボランティア活動を実施してきた。

このような学生の支援活動と並行し、教員主体による震災時の状況を記録に留める活動を継続している。調査は、地域の自治組織からの依頼により、被災の状況を後世に伝えることにある。これは本地区を過去に襲った明治29年、昭和8年、そして35年のチリ地震にともなう津波の記録（地域史）があまりにも少ないことに起因する。

聞き取りの項目は以下の通りです。

- ① 地震発生から避難までの判断と、その根拠となった情報。
- ② 避難の状況、経路。
- ③ 一次避難所から始まった避難所での生活。
- ④ 現在のくらしと、今後の見通し、そして希望。

1 鵜住居地区

調査対象地域である鵜住居地区は釜石市の北側に位置し、国道45号線に沿って両石湾より箱崎半島、北側大槌湾に面した室浜まで。片岸より御廟坂トンネル、室浜から海岸線の県道231号線で大槌町に接する。集落は釜石東部漁業協同組合に属している室浜、片岸、仮宿、桑ノ浜、白浜、箱崎、根浜、両石（水海を含む）の集落と漁港をもつ。

この鵜住居地区は被災前の人口6630人中、死亡／不明者数が587人。釜石市全体で931人であるからその63%を占めている。人口あたりの死亡／不明者の比率は市の平均2.33%に対して8.79%であり、2番目に高い釜石地区が3.29%であるから、格段に被害の大きかった地域である。（釜石市2011、11月統計による）

2 調査の経緯

本調査は被災地の自治組織からの依頼によって2011年8月から本年度2013まで3年度にわたっている。

2011年度は片岸地区住民の大半が避難していた上栗林避難所の代表を務めていた柏崎龍太郎氏の依頼により、「片岸地区」を対象として実施。北海道のNPO法人「ねおす」のコーディネートによって田中（夏子）、高田（著者）、学生、卒業生と共に3次調査まで実施。役所職員も含めて、計20名からの聞き取りを行った。（注1）

この調査報告では、「てんでんこ」といわれながらも年老いた家族を置いて逃げなかったといういくつもの事実、日々励んでいたウォーキングの習慣で、なんとか津波を振り切って救われたという年配者たちの話、小高い海岸線に祀られた神社の防災機能、海からの変化を感じて船をいち早く避難させた潜水夫の知恵、釜石の模範とまでいわれた上栗林避難所の自主運営体制等を報告している。

2012年度はNPO法人釜石東部漁協管内復興市民会議から、管内の片岸を除く集落である「室浜、仮宿、桑ノ浜、白浜、箱崎、根浜、両石」の調査を依頼

される。教員は重富恵子、林公則が加わり、本学学生19名と旧白浜小学校校舎に寝袋で自炊しながらの1次調査となった。2次まで実施。調査のコーディネートは「ねおす」から分離独立した「三陸ひとつなぎ自然学校」による。

箱崎半島の南側（釜石方面）に開けた仮宿、桑ノ浜漁港は、極めて小さな漁港であり、集落は15m以上もある断崖の上にあった。昭和8年の大津波ではほぼ集落全体が壊滅した両石は、その後、高台を造成して住居の多くを移転していた。ところが波は断崖を越え、両石の高台では再奥部まで這い上がり、造成地全体を呑み込んでしまい多数の犠牲者を出すことになった。一方半島の北側大槌湾側の方が波高は低いが平地部分が多いためにやはり奥部まで波が到達することになる。

2013年度は鵜住居自治会からの依頼で同地区の調査を実施。これまでの地域が漁業またはその関連者の多い集落であるのに対して、歴史的には漁村ではなく、畑作や養蚕、南部駒の生産などで生計を立ててきた集落である。またこれまでの明治29年、昭和8年の津波においては鵜住居川河口に位置しているが浸水地域が狭く、被害が最も少なかった地域であった。それ故に住民の避難行動が遅れて多くの犠牲者が出るようになった。また建てられたばかりの防災センター2階に避難した多数の住民が亡くなったという複雑な事情がある。

現在は9月に2期にわたり1次調査を終えたところである。3月には3冊目の報告書を出す。

3 希望をつなぐ若者たち

震災から9月で2年半を越えた。多くの人々がまだ仮設住宅で暮らし、復興への希望を繋いでいる。しかし実際には復興計画の道のりは厳しく、住民の合意形成も一歩ずつの前進である。更地の被災現場には今年も夏草が繁る。

しかし希望は「若者たち」の新たな動きにある。鶴住居では中学生たちに秋祭りで行なう「虎舞」の稽古をつける青年団の若者たちと出会った。現在鶴住居に残っている男子中学生ほぼ全員が、この時期は毎夜、神社前のプレハブで行なわれる稽古にやって来る。仕事を終えてから1時間近くも車を飛ばして指導に来る青年もいる。被災時には命がけて水門を閉め、老人たちを背負って逃げたという消防団や消防署員の若者たちである。彼らは伝統芸能を伝えるという行為を通じて、「心」を次の世代へと繋いでいる。



本年度の調査コーディネーターは「三陸ひとつなぎ自然学校」のスタッフ柏崎未来(片岸出身)に加えて、原豊が釜石に移住して5月からこの「三陸ひとつなぎ自然学校」のスタッフとして働き始めている。彼はこの春までは葛巻にある「森と風のがっこう」のディレクターであった。10年余勤めた職場を辞して、釜石市が募集した釜石リージョナルコーディネーター(通称・釜援隊)に応募した。公式face bookには、復興にあたる「ステークホルダーの連携を促しつつ、地域の住民が一体となってまちづくりや産業復興を進める上でのコーディネーター、つまり架け橋役です。」とある。(注2)

彼らの定例会議に参加して調査協力をお願いした。

この会議で檄を飛ばす威勢の良い若者がいた。会議後に紹介されると財務省出身の嶋田賢和副市長(1983年生)であった。彼は全国最年少の副市長として復興の陣頭指揮をとっている。

現在13名の若者たちが釜原のように、各組織にスタッフの一人として入り込んで、組織のコーディネーターの仕事を引き受けている。8月からはNPO法人「ねおす」の事務局長であった齊藤学も移住した。このように「三陸ひとつなぎ自然学校」は2人の強力な力を得て次のステップを踏み出そうとしている。



箱崎半島 二万五千白黒地名

(注1) 高田研、田中夏子『岩手県釜石市 片岸地区聞き取り調査報告書』、都留文科大学(2012)
(注2) 高田研、田中夏子、重富恵子、林公則『岩手県釜石東部漁協管内 東日本大震災に関わる聞き取り調査報告書―飯宿、桑ノ浜、白浜、箱崎、根浜、室浜、両石地区』、都留文科大学(2013)

(たかた けん・本学社会学科環境・コミュニケーション創造専攻教員)



虎舞

県民コミュニケーションカレッジ「健康に役立つ音楽の不思議な力」の実践報告

10月5日・19日

■清水雅彦

2007年度より山梨県内11の大学・短期大学と特定非営利活動法人「大学コンソーシアムやまなし」の共催事業として実施されているこのコミュニケーションカレッジは、研究・教育機関である大学が現代におけるさまざまな課題に一般市民の皆様と取り組みながら、潤いある豊かな生活を創ろうとする役割を担っています。今回これを「音楽」で担当して欲しいという要請がありすぐに思い浮かんだのが「音楽療法」、そしてそのジャンルの牽引者である当大学非常勤講師である青拓美先生のお顔でした。すでに多くの学生を惹きつけている青先生の講座は今回もやはり魅力的で、参加者から多くの賞賛の声が寄せられたことを申し添えさせていただきます。以下、青先生の報告をどうぞご一読ください。

(しみず まさひこ・本学初等教育学科教員)



響きあふ心と心

認定音楽療法士・アオ・ミュージックスクール代表

青 拓美

このたび都留の市民のみなさまとはじめて「音楽療法」を共に学びあう機会を得ることができたのは、誠に素晴らしい体験でした。思えば私が音楽療法を開始

した32年前は、「音楽療法?」「なにそれ:音楽で病気が治るの?」という冷たい反応しか返ってこない時代でした。私は音楽療法領域成り前の黎明期から同志で作った研究会の活動に励み、徐々に全国組織への基盤を固めるため活動を続けてきました。1996年からは全日本音楽療法連盟(日本臨床音楽療法協会と日本バイオミュージック学会の連盟)による音楽療法士資格認定がはじまり、私はその第1期生になりました。2000年に両者が合体してそのまま現在の日本音楽療法学会認定音楽療法士資格に引き継がれています。その間、東邦音楽大学の音楽療法コース設立の責任者や、音楽療法を含めた「臨床音楽技術・技能および学」を深めたいと設立した「日本臨床音楽研究会」会長に就任するなど、現在も音楽療法の世界に深くかかわり続けています。このような一般の皆様が音楽療法に寄せていただく熱い期待は本当に嬉しく身の引き締まる思いです。

今回、4コマの講義で「音楽療法の概論」「発声と歌による音楽療法の実際」「高齢者の音楽療法」「発達障害児・者の音楽療法」を行なうことができました。

まず「概論」では音楽のもつ不思議な力を脳神経学的・身体的・心理的および社会的に分析した松井紀和博士の理論を紹介しました。たとえば運動会の徒競走のときに遅く暗い静かな曲がかかると全速力で走る気持ちになりません。音楽が運動神経に働きかけるからです。偶然、耳にした懐かしい音楽を聞いた瞬間、ずっと忘れていた友人の顔や昔よく行った場所などの情景を、脈絡なく思い出すことがあるのは、音楽が長期的記憶と結びつきやすいからです。また、音楽を聴いた瞬間に好みと重なったときに涙が出たり深く感動

するのは、脳の感情中枢に直接的に影響するからです。そこに論理思考がはさまれないのです。このように音楽には独特の人に与える影響があるのです。

次の「歌による音楽療法」では発声の基礎的システムの理解を深め、肉体が楽器として成立する要素を考え、体験しました。声帯に優劣はほとんど無いこと。腹筋を鍛えずに硬くなると声が硬くなること。腹から声を出す、つまり腹を柔らかく揺らして声帯と連動して振幅を大きくする実験。発声が改善するには何をしたら良いか、具体的に学びました。とくに、ラジオ体操で行なわれる深呼吸が胸式呼吸になっていて発声には極めて悪影響があること、口呼吸でアレルギーになりやすく健康上にも大いに問題があることを体験し、戦前の声を出しながらの徒手体操や応援団の腕を開きながら発声する方式⇨青式呼吸発声法を学んでいただきました。集団での発声レッスンのような講座にもかかわらず、ご参加の皆様が積極的に取り組まれ、声の変化を体感していただけたのは本当に嬉しい瞬間でした。

二日目は「発達障害者の音楽療法」をテーマに既成曲を覚えられない対象者でもその場の自由な即興で出来るリズム・セッションの方法を体験していただきました。ラテン・アフリカン・アジア・そして日本のさまざまな打楽器を持ち込み、音そのものの面白さや、それを聴く集中力の意味を感じ、対象者が練習することなく楽しめる音楽のやりかたを紹介しました。

「高齢者の音楽療法」では発声の改善の意味と意義を考えました。耳が遠くなり、声が出づらくなると意志疎通の意欲を失い、認知症へまっしぐらになります。歌は呼吸器を鍛え、口唇の筋肉、気管の気道を確保し



ます。むせたり咳き込む誤嚥下を改善する関係の筋肉の鍛錬になります。高齢者の元気を取り戻し体調を改善するのに直接的に役立つ、音楽療法がもつと広まると、破綻しかけている高齢者福祉財政の一助になるのではないのでしょうか。

今回、講義のみならず実際に声を出し楽器を奏でて体験的に音楽の新しい活用法である「音楽療法」の考え方を皆様熱心に取り組んでくださり本当に感謝して



います。音楽療法の可能性を実感していただけたことは大きな意義のあることだと思っています。

(あお たくみ・本学非常勤講師)



平成25年度「子ども公開講座」 下記6回のべ参加者134名、児童124名

日にち	講座名	講師
6月30日	都留は自然の博物館	北垣憲仁 本学教員
8月 1日	音楽を楽しもう！	清水雅彦 本学教員
8月 6日	葉脈しおりの入ったしたじきを作ろう！	吉住典子 名誉教授
8月 9日	読み聞かせから読書の楽しさを	日向良和 本学教員
8月19日	Hello! 英語でワクワク	奥脇奈津美 本学教員
10月 3日	折り紙を使った算数	寺川宏之 本学教員

小学生と英語で楽しもう！ 「Hello! 英語でワクワク2013」

■奥脇奈津美

2013年8月19日、子ども市民公開講座として「Hello! 英語でワクワク2013」を開催し、都留市内の小学生約30名が参加してくれました。今年度は、エリック・カールの「The very hungry caterpillar」（はらぺこあおむし）を題材に、内容重視型学習を行ない、講座のゴールをドラマ（劇）発表と設定しました。

この絵本は、卵から幼虫、さなぎ、蝶という変態を経て、美しい蝶が誕生するまでを描いたものです。講座では、英語で読み聞かせる前に、ことばの学習として、絵本にでてくる「曜日」、「数」、「色」、「食べ物」

に関する英語を、歌やカード、絵を画くことを通して学び、その後、内容学習として、さまざまな色の蝶の幼虫、公園での「卵探しゲーム」、手作りビデオ「蝶の変態」の視聴を行いました。このような活動を行なったあと、英語で絵本の読み聞かせを行ない、その一場面をドラマ化する実演へとつなげていきました。決められたセリフに自分のアイデアを加えるという工夫をし、何度も繰り返してセリフを練習してから本番に

のぞみましたが、緊張しなが

らも身体をフルに使って英語で発表し、観客から拍手をもらったときの小学生ひとりひとりの笑顔は、大変誇らしげでした。

「英語で劇ができた！」という経験が、今後の自信へつながっていったらうれしいです。

（おくわき なつみ・本学英文学科教員）

講座を担って

■前川未来

ワクワク英語教室への参加は、地域の児童と関わり、実際に小学生への英語の指導を経験できる貴重な機会でした。当日の活動では、自分たちから英語を話す児童

童がいたり、思っていた以上に感覚的に英語を理解できることが多かったりと驚かされ、また、英語を話せるようになろうと自発的に質問してくる児童の様子を見てとても嬉しくなりました。活動中は、想定外のことが多く、普段の授業だけでは学べないことや、実際に教えてみて学ぶこともたくさんありました。子どもたちとの楽しい英語教室の時間は、私にとって貴重な経験となりました。

（まえかわ みく・英文学科3年）



「折り紙を使った算数」を終えて

■ 寺川宏之

「子ども公開講座」をお引き受けするのは、昨年の東桂小学校に続き2回目になります。テーマは昨年と同じく「折り紙を使った算数」で、「プラトンの立体」と呼ばれる正多面体（合同な正多角形を面とする立体図形）を扱います。それらは、4枚の合同な正三角形を面とする「正四面体」（イメージは昔、給食に出された牛乳のテトラパック）、6枚の合同な正方形を面とする「正六面体」（イメージはサイコロ）、「正八面体」（面は正三角形）、「正十二面体」（面は正五角形）、「正二十面体」（面は正三角形）の5種類であり、講座では扱いませんが、実際にこれら5種類しかないことが証明できます。「折り紙を使った算数」の目的は、子どもたちに実際に立体図形を作成してもらい、それを手にとってみることで、頭の中で想像しただけでは感じることのできない図形の感覚を実感してもらうことです。

さて、今年も宝小小学校の子どもたちとの「子ども公開講座」でした。今年の特徴はほとんどが1年生ということです。「折り紙を折る」という作業は簡単そうに思えるのですが、実際にやってみると、かなりの集中力と正確に折るといふ技術が求められます。果たして1年生が途中で飽きずに美しく正多面体を折ることができるものなのか、少し心配でした。そこで、岡野恵司先生（本学講師、初等教育学科算数・数学科）に

も協力して頂き、前半に「図形クイズ」を入れることにしました。「図形クイズ」は、はじめに三角形、四角形、円のパーツを配布しておき、それらを組み合わせることができる平面図形について、出題側が説明し、解答者側が実際にパーツを並べてその図形を作って答える、というゲームです。「図形クイズ」はゲームのルールや方法を理解するまで少し時間が必要でした。また、「折り紙」では折り紙が動かないように押さえておいてあげるなどの補助があれば、指の力がまだ弱い子どもたちでもできることがわかりました。

昨年もそうでしたが、こちらも楽しくて、あっという間の1時間半でした。補助員として手伝ってくれたゼミの学生たちにとっても、よい経験になったはずです。子どもたちのクイズに正解したときや多面体が完成したときのうれしそうな笑顔が心に残っています。

（てらかわ ひろゆき・本学初等教育学科教員）



子どもたちの楽しみの可能性にびっくり

iPadを使った紙芝居とよみ聞かせ・ブックトーク

■日向良和

地域交流研究センター平成25年度都留文科大学子ども公開講座の一つとして、昨年度と同じく「よみ聞かせから読書（どくしょ）の楽しさを」を宝小中学校にておこないました。昨年と同じく、iPadを使った電子紙芝居、電子絵本のよみ聞かせを中心におこないました。

今回の講座では、初めての試みとして、山梨県都留市出身で、昨年シリアのアレッポにて取材中銃撃を受けて亡くなられた、山本美香（やまもと みか）さんの著書『戦場を取材する』のブックトークをおこないました。

今回のプログラムは、大型絵本として「からのパンやさん」（かこさとし著）、iPadを使った電子紙芝居「ねずみの嫁入り」「十二支のはじまり」「さるかにがっせん」「おむすびころりん」、そして『戦場を取材する』のブックトークをおこないました。宝地区の学童保育の子どもたちを中心に、約10名の子どもたちによみ聞かせをおこないました。

「からのパンやさん」は、カラスのパン屋さんが、子どもたちのおやつとして、さまざまな形や味のパンを焼いていくうちに、他のカラスも買うようになって、大繁盛するお話です。大型絵本の大きな画面いっぱいカラスといろいろなパンが並んでいるページがクワイマックスです。

電子絵本はiPadのアプリ『こえほん』の中にて一つ

100円〜300円程度で購入できる絵本です。よみ聞かせの音声も入力されていますが、今回は私の声でよみ聞かせをおこないました。大きなスクリーンいっぱい絵が投影されるので、子どもたちは映画を見ているような気分になります。また多数の絵本をiPadの中に格納でき、家庭で本の片付けや収納に悩んでいる方にもおすすすめします。



『戦場を取材する』は山本美香さんが、アフガニスタンやイラク、アフリカの紛争地で、難民やそこに暮らす人々を取材したときに感じたこと、自分がなぜ紛争地の一般の人たちの姿を伝えるのかについて書かれた本です。印象的な言葉などをスクリーンに表示しながらブックトークシナリオを使って本を紹介します。私が印象的だったのは、アフガニスタンで作戦中のアメリカ軍の若い兵士の言葉「私は人の命を救う看護師になるために、アフガニスタンで人を殺している。矛盾しているよ、最悪だ」という言葉です。アメリカ軍は数年兵士となり、除隊すると大学に行くための奨学金が出ます。看護師になるための奨学金のために、人を殺す仕事に就くことに大きな矛盾を抱えている青年の姿を考えさせられました。ちょっと小学生には難し

い本でした。

また、今回はiPadを3台おいて、自由に子どもたちに使ってもらいました。インターネットには接続されていなかったのですが、付属のカメラで自由に遊ぶ子どもたちをみて、子どもたちの楽しむ姿のバリエーションにびっくりしました。

今年も11月2日の学園祭で、よみ聞かせ会を開催します。デジタル、アナログそれぞれの利点を活かして、読書の振興につなげていけたらと思います。

（ひなた よしかず・本学情報センター教員）



子どもたちと過ごした煌めきの時

■ 清水雅彦

連日猛暑が続いたこの夏の一日、子どもたちと大学の音楽研究棟Mホールで過ごした煌めきの時を、今懐かしく思い返しています。「子ども公開講座・音楽を楽しよう」は昨年に引き続き2回目となるものですが、大学地域交流センターと都留市教育委員会との連携事業に關らせていただけたことを光榮に思うとともに、開催にあたっての準備や当日の進行を手伝ってくれた学生5名にとっては、生きた研究の場となったことを感謝しています。

当日は他の急なイベントと重なったことでの予期しない数の欠席があったこと、また逆に名簿に無い子どもの参加や参加者の弟(4歳)の飛び入りがあるなど、最終的には低学年を中心とした20名ほどの講座となりました。ただ、予め名簿から用意していた名札の作り変えなどから導入は計画通り運べず、こちらの臨機応変ぶりが最初から試されるところとなった、しかしそれも含めて心から楽しみながら時間が過ぎたのは、子どもたちに感動し続けたから、と思います。

通常、小学校の授業は45分間。それを1時間30分音楽に集中させるということで考えた進行案は次の通りです。

- ・お名前リズム(名札にある自分のお名前リズムを確認し話す↓たく↓ステップする)
- ・リズムを叩こう、リズムで歩こう(四分音符、八分

音符、二分音符の確認)

・どっちが高い?(同種類の Copp に入れたたいて確認、ドとソ、ド・ミ・ソなどをミュージックベルやトーンチャイムを使って)

・「チューリップ」「きらきらぼし」を歌おう、鳴らそう(音名唱、楽譜を目で追う練習)

・3つの和音(IVVを聴き分けポーズをとる)

・ドレミの歌の大合唱(皆で2番のドレミに他の言葉をあてがう ドレミと歌う時にミュージックベルを鳴らす どんなときにもくは足踏み 途中から大学のミュージックベルが参加 終わりのソドはポーズで締めくくる)

今回の講座を受けて夏休みの自由課題研究を決めた子どももいたとのことですが、子どもたちの達成感に溢れた顔、また参観していたお母様たちの優しい笑顔が印象的でした。

最後に子どもたちからいただいた感想の一部を記します。

「Copp のやつが楽しかった(3年女)、ドレミのうたをかかんがえるのがたのしかった(2年女)、ベルをやったときたのしかった(2年女)、うたがたのしかったです(1年男)、おんがくってたのしい(1年男)」

(しみず まさひこ・本学初等教育学科教員)



中学の社会科をどう創り出すか

— 現職教員教育講座を受講して —

■佐藤親雄

久しぶりに現職教員教育講座に参加させていただきました。中学校の社会科の授業からはなれて何年も経っていますが、今でも機会があれば授業をしたいと思っています。そのためこのような講座でお話を聞くことは、大変刺激になりうれしかぎりです。また、現在の立場上、授業に対してアドバイスを求められる機会も多く指導もしなくてはならないので少しでもその助けになればという思いもありました。

そもそも、この講座を受講しはじめたのは、だいぶ前になりますが、動物学者でありナチュラリストである今泉吉晴先生のお話が聞けるためでした。実際に動物たちの暮らしのフィールドに身を置き見ることで知る研究スタイルに感銘を受け大変楽しい一時を過ごしたことを今でも覚えています。現在の講座スタイルは当時のものと変わり授業実践を中心にしたものとなっていますが、講座の先生たちの熱い思いは変わらないと思います。

今回の講座でとくに心に残ったのは私が社会科を受け持っていたことありますが、講座一日目の非常勤講師の田所恭介先生の「学習意欲を引き出す学びづくり」です。とかく、中学校の社会科は生徒から暗記科目としてとらえられていて社会科の楽しさを作り出し伝えていくことが大変難しいと教師の間では話題になります。私は社会科は子どもたちに「生きる力を育て

る」「世の中を見る目を育てる」ことであると考えています。田所先生のお話は「人間らしい生きる力としての学び」を求めて授業を創ってききましたという言葉の通りの内容でした。歴史学習のねらいを「歴史的に考える力を育てる」「生きる力を育てる」ととらえ、楽しい授業づくりのためにモノを持ち込み体を使って学ぶことをお話ししてくれました。「実物のマグロの頭を持ち込んだの授業」、「水俣に生きる人々の授業」、「江戸にきた象の授業」、どれをとっても刺激を受ける内容でした。田所先生の実践を同じ職場の先生たちに少しでも伝えることができればと思います。

(ざとう ちかお・山中湖村立東小学校長)



7月25日 理科の講座の様子

平成25年度 都留文科大学現職教員教育講座 テーマ：教師の子ども理解と学習指導

【第一日目】7月25日(木)

会場:本学2号館102教室

午前 9:30 ~ 午前 9:45	受 講 受 付 (2号館)
午前 9:45 ~ 午前 10:00	『講座の趣旨について』 説明:杉本光司 (地域交流研究センター長)
午前 10:00 ~ 正 午	『学習意欲を引き出す学びづくり』-社会科教育を通して- 講師:田所恭介 (本学非常勤講師) 内容:暗記科目と言われがちな社会科ですが、子どもの瞳が輝くような学びをどうしたらつくり出せるのかを、具体的な教材を通して考えます。
午後 1:00 ~ 午後 3:00	『教科に関する研究講座Ⅰ』-子どもがわかる授業を作る・理科- 講師:平野耕一 (本学准教授) 内容:実験キット等ではなく、身の回りにある道具を用いて手軽にでき、生徒の興味を引くような、有効な実験の方法を多数ご紹介します。

25日参加者 19名

26日参加者 32名

【第二日目】7月26日(金)

会場:本学2号館102教室

午前 9:45 ~ 午前 10:00	受 講 受 付 (2号館)
午前 10:00 ~ 正 午	『子ども理解と学習指導』 講師:山崎隆夫 (本学非常勤講師) 内容:子どもに寄り添い、支えるとはどういうことなのかを考えるとともに、その手立ての中心となるべき学習指導のあり方を実践的に検討します。
午後 1:00 ~ 午後 3:00	『教科に関する研究講座Ⅱ』-算数を楽しむ授業をつくる- 講師:岡野恵司 (本学講師) 内容:本講座では、身近なものを使って、生徒に算数のおもしろさを伝える話題を紹介し、その中にある数学的意味を考えます。

講演 「スポーツと育てるカウンセリング」

↳ ロンドンで見たチームJAPANの絆の強さ

5月24日(2101教室)

■ 講師 土屋裕睦 (大阪体育大学教授)

学級や部活動の指導の基本を考える

■ 梶原 斉

今回の土屋裕睦教授の講演を聞いて、私自身が行き詰まりを感じていた学校教育(部活指導、学級指導、生徒指導など)に対して、光が射したように感じた。

土屋教授は、ロンドンオリンピックでのチームJAPANの絆の強さを検証する中で、「通常、団体種目になると、それぞれの価値観の違いなどから、個々の選手が持てる力を発揮しきれないことが多い。しかし、チームとしてのまとまりを高められたり、チームとして自信が持てれば、個々の能力を越える力を発揮できる」と説明している。その要因として、東日本大震災を経験したことで「絆」が合言葉となり、団結力を高める要素となったこと。また、福原、太田らが過去の大会で世界に通用する成績を示したことで、全体の自信や士気が高まったことなどをあげている。(実際、卓球の石川が福原を憧れ目標とし努力を重ねてきたことも、個人の實力やチーム力の向上につながったのではないかと思った。)

しかし、選手の努力だけで、ここまでの成績が残せたのではないことは明らかである。やはり、チーム力や選手たちの實力を高めていくには、水面下での監督、コーチの努力や支え、またメンタルトレーニング指導

士の資格を持つ専門家などのサポートがあったからだと思います。でも、中学校現場では、専門家やコーチなどはほとんどいない。だから、私たちが積極的に学ぶことにより、監督と同時に専門家やコーチの役割を果たすことができると強く感じた。土屋教授には、メンタルトレーニング(試合場面での實力発揮に役立つ心理的なスキルを学習すること)によって、競技意欲(やる気、闘争心、忍耐力)、精神の安定(リラクセス)、集中力、自信、作戦能力(予測力・決断力)、協調性(チームワーク)などは、向上できることを教えていただいた。また、構成的グループエンカウンター(SGE)の実践例により、自己理解、他者理解、自己受容、感受性促進、自己主張、信頼体験など、ありたいようなあり方を模索する能率的な方法としてエクササイズという誘発剤やグループの教育機能を活用したサイコエデュケーションも教えていただきました。

かつて私は、部活指導や学級指導がうまくいかず悩んだときに、子どもの責任にしまい怒るだけの指導をしてきた。しかし、教員としての経験や実践、学習を通して、教育の本質やあり方などを学んできた。学級や部活動が集団として、あるいはチームとして初

めから成り立つものではなく、本気になり本音で関わり合うからこそ集団の質が高まっていくのだと今は感じている。最近、話題になっている「体罰」も同じで、スポーツ指導の場合、「体罰」は不適である。負けて体罰、ミスして体罰、はあり得ない。なぜならスポーツの価値は、もともと負けてこそ成長、ミスしてこそ成長。本来罰せらるべきものでなく、本人の悔しさにどう寄り添うかが、コーチングの本質だからである。このことも心に刻み、さらに自分自身が向上できるように努力していきたい。

(かじはら さとし・勝山中学校教諭)



講演会の様子

都留短期大学の「夏期大学」(昭和30年)の記録(資料)

本学の公開講座の歴史については、都留短期大学開学の年の昭和30年(1955年)の「夏期大学」のことが、「単発的なものであった」として、『都留文科大学創立五十年記念誌』(2004年2月)に記されています(71頁)。その記述の根拠になったと思われる都留市広報の記録を、資料として掲載します。(なお、この資料の確認のためには、近藤幹雄先生をはじめ、都留市郷土研究会の方々、大学職員・図書館司書の方々のご協力を得ました。)

ところで学校開放講座の分野については、文部省は戦後直後より社会教育の施策としてさまざまな通達を出し、「文化講座」「専門講座」「夏期講座」などが文部省委嘱または大学の自主性にもとづいて開設されていきます。しかしこうした動きは1950年代中葉以降衰退していき、再び大学開放への関心が高まるのは高度経済成長期以降のこととされます。前記『記念誌』でも、「第一回大学公開講座」が1974年に「長年の空白」を経て開設された、と記されています(71頁)。本学の今日の公開講座も、理念、内容、方法など実践的模索の途上にあるといえるでしょう。(畑潤：編集長)

都留市広報第十三号 昭和三十年七月二十日発行より

「公民館だより」

夏期大学開設

一、主催 都留市公民館 都留短期大学

二、期日 七月二十二日から二十四日まで 三日間

昼間部 毎日午前八時三十分から正午まで

短期大学講堂

夜間部 毎日午後七時半から十時まで

谷村第一小学校講堂

三、講議題目と担当者

社会道徳について 都留短大長 友枝高彦

タンホイゼル物語 短大教授文博 福島政雄

輸出産業とガット協定 // 御園生桂三郎

肥料について // 加納直綱

階級観念と道徳 // 小田和金貞

紫式部の生き方 短大助教授 石村正二

愛児の智能の伸し方 // 八野正男

人類による自然の変容 短大講師 鈴木恵祐

家族の法律 // 穂積秀次郎

音楽(ピアノと歌の集い) 短大助教授 藤沢五十鈴

山大助教授 小池寿郷

その他毎日大学在学生の独唱・合唱、聴講生のレク

リエーション等を実施する。

四、聴講について

①聴講無料

②講義内容は極めて一般向であるから多数の方々の

御来聴を望む。

都留市広報第十四号 昭和三十年八月十五日発行より

夏期大学講座好評

塩山、大月等からも聴講

都留市弘報六月七月の合併号で発表した夏期大学講座は計画の通りに七月二十二日から同二十四日まで毎日昼夜二回に開講しました。講師の都留短期大学の先生方も夫々研究を傾けられて熱心に講義をせられ、聴講者も延三百六十名に達し、都留市民だけでなく塩山市大月市等からも出席された方もあつて、道徳・科学・芸術・宗教の各部門に亘つて極めて内容が充実し、趣味と実益の豊かなものであつた。

その上レクリエーションとしての山梨大学の小池教授の独唱・薩摩琵琶・日本民謡・踊等は非常に喜ばれた。

都留市公民館では今後時々都留短期大学の開放講座としてこの催しをする計画ですから、市民各位は奮つて出席する様希望いたします。



ジャーナリスト 山本美香さんの取材を通して

■ 萩原好一

昨年八月、山本美香さんの悲報を受けた私は、その後HRや授業などを通して生徒たちに彼女の話をしてきました。シリアのアレッポで銃撃され、亡くなった日本人ジャーナリストは自分の大学時代からの友人であること。前年、東日本大震災で亡くなった大学時代の友人夫婦の墓参りに一緒に行ったばかりだったということ。知り得た情報を世界に伝えること。平和を築く力になると信じていたこと。自分の経験を若い世代に伝えようとしていたこと……。

それから半年以上が過ぎた今年の五月、「学園祭のクラス新聞の記事として、山本美香さんを取り上げたい。」と新聞担当の生徒たちが提案してきました。生徒たちは紛争地の現実を世界に発信していた彼女について書くことが、今年の全校共通テーマ「繋」に結びつくはずだと考えました。そして何よりも、美香さんが危険を冒してまで私たちに伝えようとしたことは何かということを知りたかったのです。

その後、新聞担当の生徒たちは私だけでなく、彼女について取材し記事にまとめた毎日新聞甲府支局の二人の記者の方、そして美香さんのご両親にインタビューをしました。新

聞社のお二人は「とにかく世界から目をそらさないでと講演会で話していた。誠実に取材し、しっかりと伝えようとした山本さんの姿勢を見習いたい。」と語り、美香さんのご両親は「(紛争地に)行きたびに考えが研ぎ澄まされ、使命感が増していった。」「報道が(紛争や戦争の)抑止力になると信じていた。」などと話してくださいました。

取材した生徒たちは、快くインタビューに応じていただいたことに深く感謝するとともに、取材を通して自分たちも新たな繋がりを得ることができたと強く感じたそうです。ある生徒は「(ご両親の)つらくても美香さんのことを伝えていこうという思いが伝わった。私たちもしっかり伝えたい。」と言いました。そして壁新聞の記事の最後を、「山本さんから託された種を、これから大切に育てていくのは、誰でもない、私たちがのだ。」という文で締めくくりました。

父・孝治さんが「ヒューマンジャーナリスト」と評した美香さん。その美香さんが蒔いた種を、彼等は確かに受け取りました。

(はぎはら こういち・韮崎高校教諭)



●●編集後記●●

○近藤幹雄先生に巻頭文をお願いし、改めて『都留文科大学事件の記録』（5頁）をきちんと読みました。そうしますと巻頭文の一言ひとことが、そして末尾の「…都留市と大学の両者が理解を深め協力し、ともに栄えることこそ大切なのです。」ということが、ズシンと胸に響いてきます。都留文科大学の教職員、学生、都留市民、市当局者が、本学の建設と自治の苦闘の歴史に目を向け、お互いに学んでいく必要があると思います。

○特集1は「大学と地域をミュージアムとして市民と共有する」としました。都留文科大学には、新図書館前ピオトープの建設を含め、キャンパス空間を大学周辺の山裾と一体的なものとして大事に見守ってきた歴史があります。かつて駐輪場になりかけた旧図書館前（4号館前）の広場もその一つで、そこのメインツリーとなっているケヤキは、今ではまことに優雅な枝ぶりを見せるようになりました。ここに31年前の写真を掲載し、この広場を見つめ直す手がかりにしたいと思います。

○美術教室を中心に「つるの宝かるた」の製作実践が行われました（20～21頁）。その作品がほんとうに美しいので、ここにカラーで紹介합니다。

○吉住典子氏による甲斐絹（かいぎ）をもちいた写真織りの「試作品」ができたということです（23頁）。その写真はカラーでないとイメージが伝わりませんので、やはりここに紹介します。

○「3・11」被災地の、聞き取りによる記録化の実践が高田研氏たちによって継続され、その報告書がまとめられています。同僚たちのひたむきな姿勢に励まされます。（28～29頁）

○この8月に「山本美香さんを偲ぶ写真展」が「都留市ふるさと会館」などで開催されました。映像でも文章でも、私たちの心に呼びかけてくるものがあります。県内の高校生たちも彼女にハートを向けています（39頁）。

○地域交流研究センター事務職員として新たに小林幸恵さんが着任しました。昨年度からの本田祐士さんは「都留市まちづくり交流センター」の仕事を中心に担当し、二人での活躍が始まっています。

○次号では、本年度から動き始めた「都留市まちづくり交流センター」の活動を特集します。また『「地域交流センター通信」10年の歴史を振り返る』ということで、バックナンバーの総目次を掲載する予定です。

（畑潤・編集長）

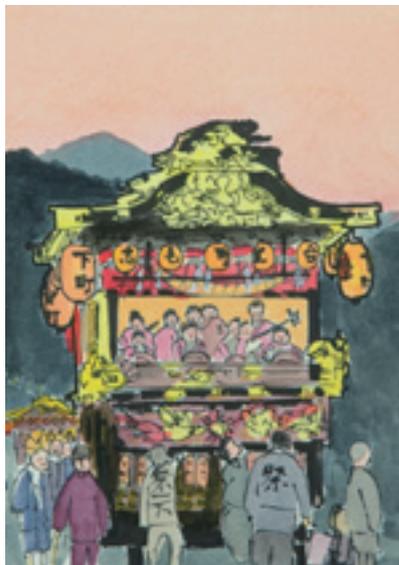
絵・成瀬洋平



本部棟より楽山を望む。1982年3月撮影



2013年9月27日撮影



21頁参照



23頁参照

地域交流センター通信 第24号：2013年12月4日

編集：都留文科大学 地域交流研究センター・通信担当（編集長・畑潤 杉本光司 佐藤隆 坂田有紀子 鳥原正教 品田笑子 北垣憲仁 久保田浩 本田祐士 小林幸恵）

発行：都留文科大学地域交流研究センター
〒402-8555 山梨県都留市田原3-8-1 tel:0554-43-4341 (代)

統括編集者：北垣憲仁